

# 「くらがり越え」の旅

— 芭蕉はどのように旅に生きたか —

石 上 敏

## 1. はじめに

「人生は旅である」という比喩が用いられる際、日本文学では『方丈記』と『おくのほそ道』の冒頭がしばしば取り上げられる。「ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず」と始まる前者と、「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」と始まる後者は、いずれも文学としての範囲にとどまることなく、日本人が人生と旅を重ね合わせる場合に持ち上げられることが少なくない<sup>1)</sup>。

私は、一昨年「<sup>くらがり</sup>暗越奈良街道と芭蕉—東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に—」と題する拙稿を草した<sup>2)</sup>。上に掲げた松尾芭蕉が、「旅の人生」と呼ばれるほど繰り返した旅の中でも、最後の旅の最後の日（元禄7年〈1694〉9月9日）に越えてきた暗峠と、最後の宿場である松原宿を考察することで、その旅の詳細をより明らかにしようと試みたものである。その結果、従来の芭蕉研究が見逃してきたいくつかのことが明らかになった。たとえば当時の暗越奈良街道は街道とほぼ直角に流れる何本もの河川（旧大和川）を渡って進む必要があつて、駕籠は少なく、街道筋に唯一置かれた宿場（松原宿）には、わずか二疋の運搬用馬しか置いておらず、芭蕉は徒歩を余儀なくされたであろうことなどである。

標高455メートルもの暗峠を越えて来るのであれば、当然駕籠や馬に乗ったであろうという推測は、ここでは通用しない。それでもなお芭蕉は、伊賀上野から川舟で大坂に向かおうとはせず、奈良を経て大坂に向かうという困難な道中を選んだのである。このことひとつとっても、芭蕉の最後の旅となった、この「くらがり越え」の旅は彼にとって特別なものであった<sup>3)</sup>。

本稿は、「暗越奈良街道と芭蕉」（以下「前稿Ⅰ」と記す）では松原宿を中心に暗越奈良街道を考察し、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」考」（以下「前稿Ⅱ」と記す）では逝去までの発句を考察したのに引き続き、芭蕉におけるこの旅の意味、延いては旅そのものの意味を考察し

てゆくものである。『おくのほそ道』を代表格とする紀行文ではなく紀行文に書かれなかった旅、それも1泊2日という極めて短い旅と、その後の動向のなかに芭蕉にとっての「旅」の意味を探っていききたい。

## 2. 旅を詠んだ発句

芭蕉はその最晩年に至り、自らの旅の人生を総括するように「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という発句を詠んだ。それが逝去4日前のことであり<sup>4)</sup>、この句を詠んだあとに新句を詠んでいないことから、この句が芭蕉の辞世句であるといわれることが多かった。しかし、同時代の人びとの認識においては、これはあくまでも「病中吟」であり、これを辞世句と呼ぶ人々が現われるのは芭蕉の没後相当な時間をおいてからのことである<sup>5)</sup>。

「旅に病て」と同じように芭蕉が旅を詠んだ句には、のちに『野ざらし紀行』（貞享2年）に結実する旅の途上で詠んだ「旅がらす古巢はむめに也にけり」（『鳥のみち』）、同じ旅で詠んだ「たびねして我句をしれや秋の風」（『野ざらし紀行』）、貞享4年末に『熱田三歌仙』の発句として詠まれ「十月九日一井亭興行」と題された「たび寝よし宿は師走の夕月夜」、杉風宛書簡に記し、『笈の小文』（同年）に「師走十日余、名ごやを出て旧里に入んとす」との題詞とともに載る「旅寝して見しや浮世の煤払」、（『あら野』）、そしておそらく同じ頃に相前後して詠まれ『続虚栗<sup>みなしぐり</sup>』に「十月十一日餞別会」として載る「旅人とわが名呼ばれん初霽<sup>しぐれ</sup>」などがある。

貞享2年（1685）から4年（1687）にかけて旅の発句が集中的に現われてくるのは、その序文によって知られる通り、芭蕉が自らを旅人であり、旅の人生を送る者たることを決意した「野ざらし」の旅から「笈の小文」の旅にかけて、「旅に生きる」ことを自らに問いかけていたことの発露であったと思われる。伊賀上野で詠んだ「旅がらす」も（後世、はしなくも「股旅物」に頻出する語となったが）芭蕉自身を指していると考えて間違いなく、「古巢」とは「旧里（ふるさと）」のことであり、これは旅の句であるとともに故郷への思いを詠んだ句であった<sup>6)</sup>。

「たびねして」、「たび寝よし」、「旅寝して」と、三度にわたって詠まれる「旅寝」からは、旅に出て慣れない環境で寝ることに不便を感じつつも、次第に興をおぼえてゆく芭蕉の旅心が伝わってくる。秋の風に「我が句をしれや」（私が詠んだ句を知っているか）と問いかけた発句からは、特に芭蕉における旅と句作とのかかわりが強く示唆される。

一方、「たび寝よし宿は師走の夕月夜」、「旅寝して見しや浮世の煤払」の両句は取りあげら

れることも少ないが、旧暦師走の厳寒のなかで、「夕月夜」を旅寝の宿とするという覚悟は、なまかななものではなく、この旅の時点で、芭蕉はすでに「浮世」から一線を画した「旅」の境地に自らを見いだしている。

延宝8年(1680)に深川の第一次芭蕉庵に入り(「芭蕉」の名乗りは天和2年より)、天和3年(1682)6月の母の死を経て、貞享元年(1684)8月に「野ざらし」の旅へと旅立つまでに、芭蕉は「旅の人生」に生きる覚悟を固めた。それは「仮の宿り」としての人生を生きる根拠であり象徴となった芭蕉庵(最初のもは天和2年12月の大火で焼失、翌年冬に再建)での暮らしが、じっさいの旅において「旅人とわが名呼ばれん」という境位に芭蕉を押し出したのである。

「野ざらし」の旅に始まるいくつもの旅を経て、芭蕉は元禄7年4月に成ったとされる『おくのほそ道』(元禄11年刊)に次のように記した<sup>7)</sup>。

「よもいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋江上の破屋にくもの古巢をはらひて、やや年も暮、春立てる霞の空に白河の関こえんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず」<sup>8)</sup>

ここに見える「いづれの年」が、この頃のことであったのだろう。確かに芭蕉は「野ざらし」に生きる覚悟をもって彼の「旅」を始めたのであるが、その後編んだ『野ざらし紀行』は芭蕉が再構築した旅の記録であり、当然のことながら旅そのものではない。それは貞享4年の『鹿島紀行(鹿島詣)』や『笈の小文』にも、元禄元年(1688)8月の『更科紀行』にも言えることであり、元禄2年3～8月の「おくのほそ道」の旅を4年かけてまとめた『おくのほそ道』(3～9月)に至って最も顕著であった。

芭蕉の旅の句が貞享2年から4年にかけて詠まれていることは、この頃の芭蕉の旅への意識を知るうえで貴重である。さらには、これらに続く元禄元年(1688)に「秋立日」として詠んだ「たびにあきてけふ幾日やら秋の風」(『真蹟集覧』)は、その構造が「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」と大きく重なる。ここからは、「旅に病て」の本意とは「長く続けてきた旅の最中に病みついて」と理解したくなるのだが、もちろんこれらは詠まれた時も場所も、その背景も異なる。ただ、芭蕉が貞享2年8月からの「野ざらし」の旅を皮切りに、「鹿島詣」、「笈の小文」(そしてその間には再度の帰郷があり、故郷を起点としたいくつもの回遊があり、江戸への帰還があった)までを終えた、ちょうど4年後に当たる元禄元年の「秋立日」、すなわち7月10日に「たびにあきて今日幾日やら」と詠んでいることは注目される。ところが、「たびにあきて」と詠んだにもかかわらず、芭蕉はその翌月には「更科紀行」へと旅立っている。

このように、あたかも自らを責め立てるかのよう旅へと向かい続けたのが、貞享2年(1685)

から元禄元年（1688）までの、言いかえれば「そぞろ神の物につきて心をくるはせ」、「野ざらし」を覚悟してからの芭蕉であった。そして翌年（元禄2年3月）「おくのほそ道」への旅が始まる。

その後、元禄7年（1694）10月に亡くなるまで、芭蕉は『おくのほそ道』に続く紀行文を書いてはいない。『おくのほそ道』の完成が元禄7年4月頃だったからとも言えるが<sup>9)</sup>、その間、芭蕉は決してどこか1か所に留まっていたわけではない。紀行文がないので名称をつけて呼ばれていないだけで、元禄2年9月に大垣を出発してから<sup>10)</sup>、伊勢で過ごしたあと故郷の伊賀上野に向かい、11月には路通とともに奈良・京都を経て大津に至り膳所で越年している。翌3年には正月早々単身で伊賀上野に戻り、3月には再び膳所、4月から7月には京都の幻住庵に滞在して『幻住庵記』が成る。そして8月以降は大津・伊賀・京都と廻って大津で越年と、畿内一円を巡っている。ただし、その間の拠点は常に伊賀上野にあり、大津・膳所・京都という限られた範囲でほとんどの時間を過ごしている。これらを「旅」ではなく「回遊」と記したゆえんである（前稿Ⅱ）。

しかし、それは「野ざらし紀行」の旅以下も同様で、芭蕉は常に深川の芭蕉庵を拠点に出発している<sup>11)</sup>。元禄元年9月に伊賀上野に帰着してから2年間を関西で過ごした芭蕉は<sup>12)</sup>、丸二年後の元禄4年9月に江戸へと出発した。10月末に江戸に戻ったが、「おくのほそ道」出立時に芭蕉庵（第二次）は人に譲って旅立ったので<sup>13)</sup>、元禄5年5月に第三次芭蕉庵が完成するまで芭蕉は日本橋橘町の借家で暮らしている。すでにこの頃になると、命そのものが仮の宿りであるという認識のなかで、借家も持家も径庭なく過ごしているように見える。

芭蕉庵（第三次）には9月から翌年まで洒堂が滞在し、その直後に病身の桃印を引き取るなど（むしろ桃印を引き取るために洒堂を追い出したふうで）なかなか心休まる暇がなかった。3月には桃印が没し、芭蕉は彦根の許六を訪ねている。芭蕉が立ち直るのは7月から8月にかけての「閉関」のあとであり、多くの論者が述べるように『おくのほそ道』の執筆が本格化したのは、この「閉関」の時期に至ってからであろう<sup>14)</sup>。「閉関」を解いてからの芭蕉には、心に揺るぎが見られない。それは、改めて「旅に生きる」という自らの原点を見つめ直し、心に刻んだゆえであろうと思われる。

芭蕉庵で年を越した芭蕉は、元禄7年の年頭から帰郷の準備を始め、5月上旬の送別句会『別座舗』を深川連衆と巻いたのを機に、11日に二郎兵衛とともに江戸を出立する。当初は江戸で見送る予定だった曾良が別れがたく小田原まで同行したのは、芭蕉との永別を予感したのか。芭蕉は名古屋・伊勢を経て27日に帰郷する。一方、江戸では留守宅となる芭蕉庵に寿貞親子が入っているが、1か月もしない6月上旬に寿貞は亡くなっている<sup>15)</sup>。

## 「くらがり越え」の旅

以上、伊賀上野に戻るまでの芭蕉の年月と動向を見てきた。本稿では、「旅に生きた」芭蕉にとって、旅が一体何であったかを考えるため、ひとつの旅に注目する。それは、これまで旅と考えられることも多くはなかった元禄7年9月8日から9日にかけての1泊2日、距離にして80kmにも満たないひとつの旅である。芭蕉は、この旅から1か月余りで亡くなるのであるが、この旅を終えた後に芭蕉がどのようにこの旅を考えていたかを見ていくことで、芭蕉における旅の意味が浮かび上がってくるのではないかと考えている<sup>16)</sup>。

### 3. 同行者たち

元禄7年（1694）9月8日、故郷伊賀上野を出立した芭蕉一行は、その晩奈良に一泊し、生駒山の暗峠を越えて大坂へと向かった。支考・惟然・二郎兵衛といった門人や縁者がいたのにもかかわらず、兄の半左衛門が、さらに家僕（または子）の又右衛門をつけたのは、芭蕉の体調がよほど思わしくなかったことを気遣ったからであろう。又右衛門は芭蕉を大坂まで送り届けた後とんぼ返りで伊賀に帰ったと思われるが、彼はおそらく翌日午後からの芭蕉の病臥を知らず、ただ道中での芭蕉の疲弊を故郷に知らせたものと思われる。芭蕉からの消息（書簡）が大坂到着後最初に書かれたのは半月も過ぎた9月23日であったために、兄をはじめとする縁者たちをずいぶん心配させたであろう。まして、その次にもたらされた消息は、10月10日に芭蕉が兄に宛てて記した遺書であった<sup>17)</sup>。

芭蕉の同行者は、支考・惟然・二郎兵衛・又右衛門の4名だったと考えられる。ところが、支考の『芭蕉翁追善之日記』にのみ伊賀上野の門人・半残<sup>はんざん</sup>が奈良で詠んだ発句が記されている。以下の論述に必要な部分なので、該当箇所を全文引用しておきたい<sup>18)</sup>。

其夜はすぐれて月もあきらかに、名に逢へる鹿は声へなきに啼乱てあはれなれば、いつしか風情の動き出て、かの池（猿沢池）のほとりに吟行。

膝見せてつくばふ鹿に紅葉哉 半残

此句鹿に紅葉ならば誰も等閑に見過すべきに、いかなる筋よりかおもひ定めけむと申に、されば声により形により風情にたよる習ひみな□物比興の教しへなりと申されしが、おろかなるものは一方におちぬべきや。

びいと啼尻声かなし夜の鹿 翁

此声は、その夜其所にありて古き都の哀れさをしらば、いづれの人か涙をおとさゞらん。支考は鈴鹿の山中にも住て鹿の音のあはれも聞おぼへ侍るに、此五文字のかなしみ今宵此所ならずばいかで承り候半そうらはんと感じけるに、阿叟（芭蕉）も此句はやすき筋をいひ得たるよし申され侍りし。

鹿の音や糸引はえてつゞら山 支考

これを信じるならば、少なくとも奈良まで半残が同行したことになる。そうであれば伊賀からの同行者は5名だったことになるが<sup>19)</sup>、半残は当時41歳、未だ伊賀上野藤堂家の家臣であったと思われ、自由に藩外へ外出することは難しかったはずである<sup>20)</sup>。半残と同様に膳所藩の家臣である曲翠は、「公務」（『芭蕉翁追善之日記』）のため芭蕉の臨終はもちろん大津での葬儀にも十分に参列できなかった<sup>21)</sup>。半残の身分は明瞭ではないが、重臣と呼ぶべき曲翠すら以上のような状況であり、半残が別の扱いだっただとは考えにくい。実際、支考の『笈日記』には半残の名は載らず、又右衛門の同行が芭蕉の書簡に記されるのに対して、半残が芭蕉に随行した記述はない。もし大坂まで同行したとしても、そこから又右衛門と一緒にとんぼ返りで伊賀へ引き返したはずであるが、すでに4人の同行者がいるうえに、さらに同行者を加えただろうか。むしろ最も介助が必要だったのは生駒山の暗峠を越える時だったはずである。後述するような芭蕉と半残の親しい間柄を考えれば、芭蕉の体調を気遣い強いて同行を申し出た可能性がないわけではない。

以上、同行者はこれまで考えられてきたように先の4名である可能性が高いと思われる。半残の発句は、彼が奈良への同行を願って伊賀で詠んだものか、あるいは支考が半残の無念を考慮して『芭蕉翁追善之日記』に書き加えたものと見ておきたい。そもそも芭蕉自身が、伊賀の山中で寒気に触れて発病したと認識していた奈良までの厳しい道中を経て、疲れ切った病身ながら宿屋で少し休息しただけで、その晩支考が記すように猿沢池畔に吟行に出たとは考え難いのである<sup>22)</sup>。ここは支考に何らかの意図があって（芭蕉が詠んだ鹿の句に重ねて、自らの俳論を際立たせるため）潤筆を施したものと考えておくのが穏当であろう。

そして、もう一人同行の可能性が考えられるのが斗とじゅう従である。『芭蕉翁追善之日記』によれば、斗従は9月2日に支考と一緒に伊勢を發ち、翌日芭蕉のいる伊賀上野に到着した。その後は、支考とともに伊賀で過ごしている。8日に芭蕉一行が大坂に向けて出発する前に伊勢に帰ったか、あるいは出発時に伊賀で別れて帰宅したことも考えられるが、芭蕉の一行に加わった可能性も考えられる。ただ、支考の記録に斗従の発句は載らず、9月5日以降は記載がないので、

## 「くらがり越え」の旅

そのあとの動向がわからない。

いずれにせよ、芭蕉の最後の旅（伊賀上野から大坂まで）には、少なくとも4名、多ければ7名という同行者が想定されるのである。それほどの同行者がいたにもかかわらず、道中、芭蕉が著しく疲弊したことは、自身の書簡の他にも、同行した支考が『芭蕉翁追善之日記』や『笈日記』に記している。そして9日の日没後に高津の門人洒堂宅に到着した翌日の午後から、芭蕉は連日午後「さむけ、熱、頭痛」に襲われて病臥する<sup>23)</sup>。25日に曲翠宛に記した書簡には、上記のように伊賀の山中で寒気に当てられて寝込んだと記しており、芭蕉は道中無理を重ねたことで発病したと認識していた。まずはこの旅が、いくら門人同士の仲裁の目的があったとはいえ芭蕉自身によって「無益の歩行」と記されるような、非常に困難な状況のなか病身を押して決行されたものであったことを押さえておきたい。

芭蕉は25日付の兄・半左衛門宛の書簡には「なぐさみがてらに参りつき」（気晴らしながら大坂までやってきました）と記しているが、それは兄がつかわしてくれた又右衛門のおかげで道中さほどの苦勞もなく無事に到着したという、兄に心配をかけたくないという配慮からであった。しかし芭蕉は続けて「十日の晩よりふるひ付申し」と、十日ほどにわたって周期的に襲う「さむけ、熱、頭痛」に苦しんだことを記している。兄には心配をかけたくないという気持ちと、兄に苦しさをわかってもらいたいという気持ちが緋い交ぜになった書簡であるが、連日の頭痛や発熱が10日も続けば意識は朦朧としたであろうし、それが芭蕉に波状的な感情の起伏をもたらしてもいただろう。そのようなせめぎあいの中の一波が、嘘ではないが真実とは異なる「すきとやみ（すっきりと回復した）」という一言だったのだと思われる。

又右衛門が半左衛門の子（芭蕉の甥）であったのか、あるいは家僕であったのかははっきりしないが、実態として大きな違いはなかったであろう。芭蕉の年齢から考えて兄の年齢は50代前半から半ば、子の年齢は当時のライフサイクルに照らして10代から30代と幅がある。復路を往路と同じにとれば3泊4日、最も急いで到着の晩の夜舟に乗ったとしても、翌日の夜までに伊賀に帰り着くのは難しい。業務の内容にもよるが、4日の離脱は相当の打撃である。よって、子であったとしても年齢は低く、家僕であれば力自慢の若者であったと考えるべきであろう。また、このことは、芭蕉の出立が急な出立ではなく、以前から日を定めていたことを示唆している。すなわち、9月9日に生駒山を越えるという「登高」を目的としていたことの傍証といえる。支考が「難波の旅行、この日にさだまる事は、奈良の旧都の重陽をかけんとなり」（『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』）と記したのは、あえて「登高」を臚化したものか、上に引用した「風情」とのかかわりによるもので、支考は「旧き都の哀れさ」にこだわっている。もちろんそれ

は芭蕉の発句に従ったものだが、やや演出がまさって見える。「かけん」は「駢けん」「掛けん」「賭けん」などが考えられるが、「掛けん」(重陽を掛けよう)が妥当であろう。そうであれば、「難波に赴く旅行に、奈良の旧都を重陽に過ごす風流を重ねて日程を定めた」という意味になるが、これが芭蕉の本意であったか、支考の想像かは未詳である。なぜ、伊賀上野から大坂に赴くのに、わざわざ奈良を通して行ったのかという疑問を解くのに、この一言(奈良の旧都の重陽をかけん)が重視されたのは、さほど古いことではない<sup>24)</sup>。それほど、この「旅」は見過ごされてきたのである。

道中、芭蕉は誰のところにも寄らず、名所も訪れていない。唯一、宿泊した猿沢池畔のみである。確かに「奈良の旧都の風雅を重陽という伝統行事の続いてきた日に訪れたい」というのは俳諧師の希望として妥当と思え、そこから夜間の吟行という描写も生まれたと思えるのだが、芭蕉の体調に照らしてみれば、この行程はあまりにも厳しい。伊賀上野から大坂の高津に至るのであれば、淀川の川舟を利用すれば(それこそ、芭蕉の遺体が大津に運ばれた際のように)時間的にはもちろん、体力的にどれほど楽だったことか<sup>25)</sup>。

一行が奈良に到着したのは夜分であり、どこも訪問していない。たとえば春日大社の重陽節供祭は康和3年(1101)に始まるとされているが、一行は重陽の朝(行程から考えて早朝)奈良を出立する(前稿Ⅰ)。このように、支考の記述にもかかわらず芭蕉が奈良で重陽を迎えようとした形跡が見いだせないのである。そこで重視されるのが重陽の「登高」であり、それを示唆するのが芭蕉が大坂到着後、新たに接した大坂の景物よりも重陽の句境に立ち止まり続けたという事実である(前稿Ⅱ)。これらから見て、「奈良の旧都の重陽をかけんとなり」は支考の推定、または勇み足であって、芭蕉の真意は他にあったと考えられる。重陽という特別な日に旧都の風情に触れたいという気持ちは優雅であって俳聖芭蕉にふさわしく、旅に殉じる姿を描くのに格好の背景だが、実際は長寿への祈りがまさったと考えるのである。

以上のように同行者の数にこだわるのは、ただ通説を訂しようと思うからではない。同行者の数が多ければ、芭蕉がどれほど苦勞をしても大坂まで行くと思ひ定めた決意の重さをうかがうことができるからである。それはおそらく4名、可能性としては最大7名という多人数であった。「おくのほそ道」でさえ同行者は曾良が1名であったし、実現はしなかったが肥前長崎までの旅は曲翠との二人旅になる予定であった<sup>26)</sup>。

芭蕉と深い信頼関係を結んだ曲翠は、しかし芭蕉の臨終に立ち会うことができなかった。『芭蕉翁追善之日記』10月13日の条に支考が記すように、「曲翠は公務のいとまなくて夜をせめてきたるが、棺符をひらき見て発哭してやまず」と、すでに封印していた棺の封を解いてまで、



周囲の人々は曲翠に最後の対面をさせてあげたいと考えたのである。その後、「家従の者、漸にしてたすけていでぬ」と、泣き崩れる曲翠は従者に抱えられて葬場をあとにした。「漸にして」は「やうやう（ようよう）にして」と読むのであろう。従僕の助けを借りて、ようやく歩くことのできる姿が、芭蕉への思いを強く感じさせる。「いでぬ」というのが、葬儀の場から出たというのか、それとも大津から膳所へ帰ったのか明瞭ではないが、いずれにしてもひとりでは歩けぬほどの憔悴の様子だったのである。9月25日付の曲翠宛書簡（おそらく受け取りは数日後）を読む限り、芭蕉はまだ十分元気に思えただけに、よけいに悲しみはまさったのであろう。「公務」とはいえ生前の芭蕉に会えなかったことが、彼の悲しみを増幅させたであろうことは想像に余りある<sup>27)</sup>。

芭蕉のこの旅は、かつて長崎を目指す大旅行の発端であると考えられていた<sup>28)</sup>。現在は、書簡等の傍証からそのような考えを示す者はいないが、第一に、「公務」があって芭蕉の葬儀にすら満足に参列できない曲翠が、何か月にもわたる長崎への旅行に同行できたとは考えられない。35歳（芭蕉に対して16歳年少）という年齢から考えても、家督を譲って悠々自適の身になってからという前提で話を進めていたというのが実態だろう。そうであれば、9月25日の曲翠宛書簡に芭蕉が記したのは、楽しみにしていた約束が果たせなくなったと述べた（知られる限り、最も早い時期の）「遺書」に相当する文面だったと取るべきである。それほど芭蕉はこの門人に全幅の信頼を寄せていたのであり、そのことを周囲の人びとも理解していた。

芭蕉の臨終にも立ち会えず、ぎりぎりになって葬送に間に合った曲翠に対して、すでに封印されていた棺の封を切ってまで最後の別れをさせてあげたのは、そのような関係性にもとづくものであった。芥川は臨終に際会した人たちを（いささかの皮肉や自虐を込めて）描き出したが、むしろその場に立ち会えなかった者たちの中にこそ、このような物語があった。

#### 4. 旅立ちまで

振り返れば、9月2日に支考が斗従を伴って伊勢を出発し、翌日伊賀上野に芭蕉を訪れたところから芭蕉の旅は始まっていたと言えるかもしれない。支考は7月5日に後日の再会を約していったん芭蕉と別れ、栗津の無名庵で2か月を過ごし、改めて『続猿蓑』の編集を進めるために伊賀上野を訪れた<sup>29)</sup>。ただし、支考が斗従を伴って芭蕉のもとを訪れた時点で、すでに大坂への旅立ちは決まっていたものと思われる。

到着後、『芭蕉翁追善之日記』によれば、芭蕉は「斗従が篤実の志ざしをよみ(嘉)して」として、「蕎麦はまだ花で饗応山路哉」(『笈日記』には「花でもてなす<sup>もてなす</sup>」)という発句を詠んでいる。伊賀の人である土芳の『芭蕉翁全伝(土芳全伝)』には、この秋のこととして、「洛の惟然、伊勢より支考・斗従、熱田より白鴻来る」と記し、割注で「支考・斗従は九月三日なり」と補記していて支考の記録と重なる。惟然は、すでに芭蕉のもとに滞在していたのであるが、支考とともに『続猿蓑』の編集に携わった形跡はない。漂泊の俳諧師らしく、ふらりと伊賀上野を訪れ、そのまま芭蕉たちとともに大坂へと下ったものであろう。ちなみに、惟然は芭蕉が果たせなかった九州への旅を芭蕉没後に最初に果たした門人として知られる<sup>30)</sup>。また、熱田の白鴻は支考の記録には載らず、句会などにも加わった形跡がない。芭蕉の大坂出立までに熱田に帰ったものだろう。この門人については、知るところがない。

ただし、先ほど斗従について見たように、支考の記録には一部の人間(もちろん芭蕉をその中心とする)の記録しか出てこない。「芭蕉翁追善之日記」という外題に象徴されるように、それはあくまでも芭蕉の記録であるという認識からであろう。さらに、『芭蕉翁追善之日記』(伊賀部・難波部)を芭蕉の記録主体に再編した『笈日記』<sup>31)</sup>に至っては、斗従すらが消去され、芭蕉の動向に記述が集中している。

そのため、斗従と同様に伊賀上野にいた白鴻も、同行者の候補に挙がる。高弟土芳の門人・竹人も土芳の記録を踏襲して<sup>32)</sup>、「洛の惟然、伊勢より支考・斗従、熱田より白鴻来る」と記している。惟然と支考が芭蕉に同行したのであれば、斗従・白鴻にもその可能性があると言える。惟然や支考が、いわゆる蕉門十哲にも挙げられるほどの高弟であったのに対して、斗従や白鴻は無名の門人であったために記載から漏れやすいということが考えられる。斗従は支考との関係から同行者に加わった可能性があるが、白鴻は蕉門での活動の実態が知られておらず、そのまま熱田に帰った可能性が高いであろう。伊賀上野から奈良へと向かうのは、熱田とは完全に逆方向になる。それでも白鴻が芭蕉に付き添いたいと考えて同行したならば、記録のどこかに出てきてもよさそうであった。

ともあれ芭蕉は、9月3日から続いていた『続猿蓑』の編集もそこそこに、8日に伊賀上野を発つことを決めた。支考の伊賀上野滞在の間に大坂の状況が悪化して、芭蕉も座視するわけにはいかず、最初の目的地を大坂に定めて9月8日に出発したという事情は考えられる。しかし、それほど火急のこととは思えず、何より支考の伊賀訪問の目的であった『続猿蓑』は未だ完成に至っていない。大坂到着直後から、芭蕉はすぐにでも大坂を離れて次の目的地へと移動する旨を繰り返し述べていて、まさか大坂で客死することになるとは考えてもいなかったと思

われるのだが。それでも支考にとって5日後の出発は寝耳に水ではなかったか。そのような経緯の背景に、9月9日でなければ意味のない「登高」を想定するのである<sup>33)</sup>。

支考は、『笈日記』の序文後半に次のようなことを書き付けており、これは公刊されたものだけに思い切った言いざまである。それだけに「元禄乙亥の<sup>あき</sup>穉七月十五日」、すなわち芭蕉が亡くなった翌年（元禄8年）7月時点での思いが強く現われている。

たゞ世の人の是非にたてる事にあさましうおぼゆるとて、老後には恨をふくめる人のもとにもひたすら行かよひて、まどかになし給へるは、是をも風雅の上にあらんと、殊さらにたふとかりける。されば、世に風雅〜といへるものも、其さま身にをはざる時は、終にあらそひの媒となりなむ。いとむつかし。その間にあそべるものゝ、その膚たゆまずといへる、世にはいくばくも侍らじを、此叟ひとり風雅の上にわすれぬるかな。

元禄乙亥の穉七月十五日 支考自序

「老後には恨をふくめる人のもとにもひたすら行かよひて、まどかになし給へる」というのは、伊賀上野から大坂へ赴いて、洒堂と之道との仲違いを仲裁したことを示しており、それもまた風雅ゆえのことであると芭蕉の行ないを賛美している。続けて、「そうであれば、世間では風雅、風雅と褒めそやしているものも、人格に沿わない場合には最後には争いの種になるものだ」と述べ、慨嘆している。そして、そのような風雅に遊ぶ資質を持つ者は、世にはいくらもないのだと述べて、芭蕉はその稀少なひとりであったと結んでいる。ここからは、支考が（むしろ支考自身が）芭蕉の風雅を阻害した者たちに「恨」を抱いており、芭蕉没後もそのことを払拭できないでいた様子うかがえる。そこには、『続猿蓑』の編集が完成を間近にして阻害されたことへの恨みが透けて見えてくるのである。おそらく芭蕉は支考にも「長寿を祈りたいので9月8日に出発する」とは言わなかったのではないか。

芭蕉は、大坂の次には支考の地元である伊勢へと向かうつもりであった。大坂での滞在も、当初は数日で済ませるつもりであったことが書簡から確認できる<sup>34)</sup>。つまり『続猿蓑』を支考の地元である伊勢で完成させるシナリオができていたものと考えられる。そのために『続猿蓑』の草稿が、たとえば斗從に託されて伊勢へ運ばれていたという可能性は高いと思われる。さらに考察を巡らせば、伊賀上野にあった草稿は斗從なりともが写した原稿の写本であり、それを井筒屋が上梓した（支考が所持した原稿はそのままどこかに消滅した）という可能性すら考えられる。伊賀上野の芭蕉の遺族（兄の半左衛門であろう）が、なかなか出版を肯じなかったのは、

未完成稿であることはもとより、じつはその元となる原稿が別のところにあることを気遣ってのことではなかったか。9月8日に伊賀上野を離れて以降、支考が編集を継続した形跡は残らない<sup>35)</sup>。いわば『続猿蓑』は未完成のまま放擲され、その出版に際して支考の関わった形跡が一切ないことなどの不自然さは、以上のように考えることで大方説明がつく<sup>36)</sup>。『続猿蓑』の編集もそこそこに芭蕉が伊賀上野を発って大坂に向かったことは、支考にとっては「恨」を残すことであったと考えられるのである。それは、あと一步で完成に至る状態にありながら、芭蕉との二人三脚の日々を示す貴重な『続猿蓑』を打ち捨てるという挙に出るほど大きな「恨」であったと考えられる。

支考と惟然は、そのまま芭蕉の逝去まで身辺に伺候することになり、又右衛門は伊賀上野に帰った。二郎兵衛は6月に亡くなった母親のこともあって江戸に帰り、その後芭蕉に合流していた。しかし、彼は発句を詠むこともなく、句会にも出席の記録がないので（未だ知られていない俳名を持っていたのでなければ）、それがいつからのことであったかはわからない。芭蕉とともに大坂に行ったことは、10月12日の芭蕉逝去に際して、大津まで川舟に乗り込む一人としてその名が出てくることから確認できる。二郎兵衛のように、そこにいながら支考の記録に載らない人がいることは、押さえておく必要があるだろう。

支考が伊勢から伊賀上野に伴った斗従も、先述の通り、その後の動向が不明である。支考が伊賀にいる間には、届け物の松茸を籠から出して並べてみたり、5日（場所不明）や6日（猿えん雖亭）の句会にも同行したと思われる。『続猿蓑』にも入集していて、彼が蕉門の俳諧師であったことは間違いない。「従（したが）う斗（ばかり）」という名の不思議も今は問うまい。支考の記録にその後一切記述がないことから、支考が芭蕉とともに大坂へと向かうのを機に伊賀から伊勢へ戻った可能性が高い。

『芭蕉翁追善之日記』にのみ登場する半残は、支考が伊賀上野に滞在していた9月2日から8日までの『芭蕉翁追善之日記』にも『笈日記』にも記載されない。6日の句会が猿雖亭で催されたと記すのに、4日、5日の句会の場所が記されないのは、何らかの憚り（たとえば公人の邸であるとか、後に支障を生じた者であるとか）があったか、支考が好まない相手であったものと思われるが、上記の通り奈良の描写に関して支考は半残に好意的である。

4、5日の句会の開催場所は伊賀上野の芭蕉生家の近在であったはずだから、当然半残亭の可能性もある。芭蕉の性向やそれまでの経緯に照らしても、たまたま訪れた門人がいれば句集の編集に加わせるか、そうでなくとも排除はしなかったはずである。しかし支考としては、当然『続猿蓑』の編集を自らの手柄としたいわけであるから、その間の伊賀蕉門との関わりは

最低限しか記していないはずである。『芭蕉翁追善之日記』には「何某の方」「爰にしるさず(記さず)」「なにかし(某)の亭」「伊賀の人」「いかなるゆへにか申されけんしらす(知らず)」とほとんどの記述に固有名詞を欠き、唯一「猿雖亭」のみが具体的な名称であった。公刊された『笈日記』は4日までの簡素な記述で終了し、5日、6日の句会は全く記されないの、猿雖(意専)の名すら出てこない。ただ、『芭蕉翁追善之日記』にはなかった惟然の発句が加わっている。

惟然は武田信玄の家臣・広瀬郷左衛門の子孫であり、美濃国は関の酒造業岩本屋の三男として生まれた<sup>37)</sup>。俗称広瀬源之丞。惟然の他にも素牛、鳥落人、梅花仏、湖南人など多数の号を名乗っている。現在の関市(岐阜県)に弁慶庵を設けたが、元禄5年に京都に移っている。裕福な生まれにもかかわらず、生涯を旅と隠逸に過ごし惟然坊と呼ばれる。彼が伊賀上野の芭蕉生家に滞在した経緯は明らかではない<sup>38)</sup>。

『芭蕉翁追善之日記』と『笈日記』のいずれにも、また芭蕉没後の追悼行事で詠まれた句の詠者として支考が記す人名の中にも、惟然は繰り返し登場するが、半残の名を見出すことができない。曲翠の例を見れば、いかに葬儀という特別な場合であっても藩士が藩外に出ることは難しかった当時の事情が強く伝わってくる。曲翠と半残では各々の藩内での身分が異なっていたとしても、半残が自由に藩外に出ることができたとは思えない。あるいは、曲翠を介添えした「家従の者」が半残であった可能性も考えられないではないが、それならば支考は「半残」と書いていたはずである。

このように『芭蕉翁追善之日記』に記された半残の鹿の句と、それに対する支考の論評に対しては疑問が持たれる。あるいは支考が自らの俳論を書き付けるために持ち出した名前であり、エピソードであったかとも考えるゆえんである。ただし、それにしては記述があまりにも具体的であり、いなかった半残の名を明記する理由は考えにくい。やはり半残は伊賀上野から奈良まで、芭蕉の体調を心配をしつつ同行してきたのであり、さらに大坂まで同行して又右衛門と一緒に伊賀上野までとって返したか、あるいは奈良からとんぼ返りで伊賀に戻ったと考えるべきなのであろう。そうであれば、芭蕉の同行者は4名から5名に増える。距離にして「十七、八里」、東海道ならば2日で通過する70km余り(実際には約74キロ)という距離である。にもかかわらず、この人数、それも芭蕉とともに大坂へ至ることが目的的ではなく、あくまでも芭蕉を手助けするためののみ同行した者が1～2名いたことになると、この「旅」の姿が変わってくる。

半残は元禄7年に41歳であったと思われ、まだ隠居の歳とは思えないが、芭蕉は同年閏5月

5日の永固宛書簡に半残とさまざまに語り合ったこと、5月21日付曾良宛書簡にも「夜がたり遊び」をしたことを記し、「旧友」と呼んでいる。年齢は芭蕉が10歳の年長であったが、気の置けない友人の一人として付き合い合っていた様子がわかる。9月23日付の意専・土芳宛書簡では「殊には半残子頼み奉り候」（特に半残君によろしく頼みます）と尚々書で念押しするほど心の通じ合った知己の扱いをしている。芭蕉への入門は逝去5年前の元禄2年とされるが、それ以前からの友人と考えられている。芭蕉が兄に宛てて綴った遺書にも、「中にも（特に）十左衛門殿」と呼んで感謝の意を伝えている<sup>39)</sup>。

支考も、そのような芭蕉の半残への思いに従ってであろうか、半残に対して好意的な評価を加えていた。「鹿に紅葉ならば誰もが深く心にとめることなく見過ごすだろうが、どのような『筋』から『膝見せてつくばふ鹿に紅葉哉』という発句を詠んだのか」と尋ねている。「筋」は蕉門での具体的な典拠や伝統（由来・背景）を指す。半残はその問いに対して「されば（だから）声により、形により、風情にたよる習いは、いずれも芭蕉の教えである」と答えている。

「比興」とは、本来は「他の物にたとえておもしろく言うこと」という意味だが、そこから「興味深いこと」「おもしろいこと」そのものの意味へと転じた。さらに「非興（不都合なこと）」という意味を派生させている。幸村（信繁）の父・真田昌幸は「表裏比興の者」と呼ばれ、建前（表）と本音（裏）が大いに異なる人物と評された。これらから、「比興」は「卑怯」の語源であるともされている<sup>40)</sup>。ここでは、「声」や「形」という「他のもの」にたとえて詠む俳諧の（すなわち芭蕉の）教えを意味している。膝を見せて（折って）つくばう鹿のような形で紅葉の落葉が積もっていると詠んだか、あるいは、紅葉の枝を鹿の（角ではなく）膝にたとえて詠んだことを評価しているのだろう。

そして、支考は芭蕉の古くからの友人にして14歳の年長者である半残の答えに対し、「おろかなるべきものは一方におちぬべきや」（深く考えの至らぬ者は、一方に（極端に）偏った理解に落ち込んでしまうものだ）と教訓を付している。半残が芭蕉の教えを理解して、作句に当たり深く考えていることを褒めたのである。さらに芭蕉の「びいと啼」の句を掲げて、「いづれの人か涙をおとさゞらん」（いったいどんな人が涙を落とさないというのだろう）という反語で強く讃嘆するのである。支考はさらに自句を掲げて、いかにも自分もまた芭蕉の側にいるのだと言いたげである。「鹿の声が糸を引くように響いている」と「つゞら山（若草山）」を詠み、「物にたとえておもしろく述べる」一例としている。支考らしい取り成しである。

ただし、これらのすべてを支考は『笈日記』では削除している。基本的に『笈日記』では、芭蕉にかかわることは削除せずに載せているのだが、ここは例外と言ってよい。その理由は不

明であり、芭蕉が半残を旧友として重く扱っていることを知って憚ったか、他に理由があったのかは未詳である。ただ、省略しながらも芭蕉と自分の発句二句のみを並べている。その結果、半残の存在は『笈日記』では最初から何もなかったように消えてしまった。もし、この一段が事実とすれば、そこには惟然も二郎兵衛もいたはずであり、あるいは斗従や又右衛門、さらには白鴻も芭蕉を見守るように侍っていた可能性がある。それらの人びともまた支考の記述ひとつで消えたり現われたりする。それどころか吟行の事実も支考の筆次第で現われ、消える。そのような不安定な情報をもとに、芥川龍之介のように想像力を巡らせて場面を創作するか、あるいは逆に、あくまでも確実な情報だけを用いて考察するという二極展開が続いてきた<sup>41)</sup>。

9月23日に芭蕉が兄半左衛門に宛てて書いた書簡には、「又右衛門かげにて」（おかげで）と兄の子または松尾家の家僕の付き添いに感謝しながら、半残の名は出てこない。確かに半残は松尾家の人間ではなく藤堂家の家臣であった。ただし、松尾家にとっては近在の人である。名前くらいは出てきても不思議ではない。そして、半残には古くからの芭蕉書簡（貞享2年、元禄2年、4年）が残っていないながら、この時に書かれた書簡は現存しない。この頃の芭蕉の体調に鑑みて、一日にそう何通も書簡を書ける状態にはなかったからであろうか<sup>42)</sup>。

または、半残が芭蕉の同行者としてではなく、単独で奈良に来ていた可能性も皆無ではない。41歳という年齢から考えて、すでに家督を譲っていた（家臣ではなかった）可能性も考えられる。しかし、『芭蕉翁追善之日記』にのみ書かれた上記の逸話は、芭蕉が伊賀上野から奈良に到着したあと夜の吟行に出るという不自然さと、家臣である半残の同行の困難さという2つの理由を最も大きな根拠として、半残の存在は支考の創作であった可能性が考えられる。もし彼が奈良にまで来ていたのであれば、翌日大坂まで同行してよいのだが、支考以外の者の記録にも、さらには句会等の中にも半残の名前はない。

もちろん芭蕉に倣ってのことであるが、この頃から俳諧師の大吟行・行脚がなされるようになってゆく。芭蕉が信奉した西行・宗祇の時代から諸国を行脚する歌人や連歌師はいたわけであるが、また中世には、たとえば戦乱を避けて長い距離を移動することはしばしばおこなわれたわけであるが、それが平時における一般の民衆へと広がってゆくの近世という時代の特徴であった。それでも、何か月にも及ぶ行脚が可能である人びとは限られていた。曲翠のような「公務」でなくとも、生業に携わる人びとの大部分には不可能なことであったに違いない。

近世後期に至れば、お伊勢参りをはじめとする長距離の旅を多くの人びとが経験することになる。しかし、芭蕉が生きた近世前期（17世紀）に限ってみるならば、それが可能な層は限られていた。芭蕉の追善忌の参加者の中に木節・尚白・風国と何人もの医師がいるのは、彼らの

職業は比較的自由に時間を使えるからであろう。一時代前には僧侶もよく巡錫を試みたが、檀家制度に縛られた近世では特別の事情がない限り困難なことであったに違いない。追善忌の参加者の中に現役の僧侶は李由くらいのものである。蕉門には宗波・千那・如風など僧侶も少なくなかったが、いずれも俳諧師としてはさほど活躍していない。むしろ木因・杉風・杜国・意専・卓袋など、商家の主人のほうが時間は自由に使えたようである。武士（藩士）でも麿時や怨水のような家老もおり、乙州のように伝馬役という役柄から藩外への移動こそが職掌である者もいた。凡兆や土芳、濁子や荊口など藩士である門人も、もともと藤堂家の奉公人であった芭蕉には少なくないが、この時代、言うまでもなく武士にはさまざまな制約が存在した。

一方、奥医師や藩医のように武士に準ずる世襲の医師もいたが、医師になるのに資格はいらすず、評判が良ければ営業を続けられた<sup>43)</sup>。芭蕉の臨終に立ち会った門人たちの中にも数名の医師がいた。ちなみに芭蕉が病身を押して大坂へとやってくるきっかけを作った酒堂は、膳所在住以来の医師である。その酒堂が芭蕉の病状を悪化させ、死期を早めたうえに病床の師匠を見捨てて大坂を離れるというのは、じつに皮肉なめぐりあわせといえる。9月27日に句会を開いた園女の夫も医師であり、一有という俳名で蕉門に属していた。

木節は、直接芭蕉の最期を看取ることになったし、風国も医師、また伊勢屋の主人であった正秀も後年医師になっている。園女も江戸に出て医師となり、のちに出家している。俳諧師として比較的自由的な時間のなかで吟行に赴いたり、連衆の指導に携わったりするためには、立机（専門の俳諧宗匠となる）以外に職業も限られたと言ってよい。一所不住の漂泊を選ぶ惟然や路通のような生き方もあり、丈艸・越人・素堂など、それに近い生き方をする市隠の人びともいた。もちろん、誰もがそこまで俳諧にのめり込むわけではなく、俳名を名乗るのが恰好づけやファッションである場合も多かった。このことは、彼らから百年ほど後に江戸で大通と呼ばれた数寄者たちが、こぞって俳名を名乗っていたことを想起すれば十分であろう<sup>44)</sup>。

ここまで、芭蕉の道中に立ち会った可能性のある者たちについて見てきた。伊賀上野に滞在していた斗従（伊勢）と白鴻（美濃）は同行しなかった可能性が高かった<sup>45)</sup>。逆に江戸から芭蕉に同行して来た二郎兵衛は、縁者として芭蕉が病気でなくとも同行したであろう。支考の最大の目的は芭蕉のもとで『続猿蓑』を完成させることであつたし、そもそも惟然は漂泊の人生を生きてきた。となると、芭蕉の体調を気遣って同行したのは又右衛門だけということになるが、それでも支考や惟然、また二郎兵衛も芭蕉の病状を当然心配していただろう。芭蕉にこれほどの同行者がついたことは確かに芭蕉の体調が悪いことを物語り、兄の半左衛門をはじめとする身内の配慮や門人たちの心配りを示唆するのだが、それ以上に、何よりも芭蕉の「この旅」



への執念を感じさせる。それでもなお、芭蕉はこの日程とこの経路で旅に出ることを選んだ。

## 5. 「旅に病て」

このように、最晩年の芭蕉のことを考察しようと思うと、そこには必ず支考の記録（『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』）が関わってくる<sup>46)</sup>。つまり支考というひとりの門人のフィルターを通して芭蕉を見ることを余儀なくされる。その一方で芭蕉は何通かの書簡を書いており、そこには相手に応じて心情の吐露がなされ、少なくない数の発句も記されている。芭蕉の旅を論ずる本稿では、大坂到着以後に芭蕉が加わった句会の考察は別の機会に譲りたい。そこで詠まれた発句については、すでに論じたのだが<sup>47)</sup>、芭蕉は大坂到着以降、繰り返し9月9日（重陽の節句）に立ち戻り、菊を詠んでいる。そして、それは9月末日にまで及ぶのである。以下、本稿では、大坂に到着して以後、芭蕉は最後の「旅」をどのように全うしたか、その旅を紀行文ではない創作物のなかに昇華し、収束させていったかを見ていきたい。

10月5日に花屋の貸座敷に移った芭蕉は、それ以降も、8日に「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という「病中吟」（『笈日記』）を詠んで支考に書きとらせ、翌9日には、この年の夏に嵯峨で詠んだ「清滝や（または「大井川」）波にちりなき（塵なし）夏の月」を「清滝や波にちりこむ込青松葉」へと改変する旨を、やはり支考に伝えるなど<sup>48)</sup>、逝去まで8日の間、俳諧に携わり続けた。むしろ9月29日に病状（泄痢）が悪化してから10月4日までの5日間と比べて、芭蕉は活動的になる<sup>49)</sup>。

以下に見る「旅に病て」の発句は、かつては辞世句であると評する向きも多かったが、現在は「病中吟」ということで落ち着いている<sup>50)</sup>。ただし、現在もなおそこに詠まれた旅・夢・枯野については、芭蕉が俳諧宗匠としての後半生において実践してきた旅であり、枯野はそれらの旅で数限りなく越えてきた枯野の総称、もしくは象徴であると考えられている。ただ、夢は芭蕉が立机をした（宗匠になった）頃に詠んだ発句「あすはちまきなにわ粽難波の枯葉夢なれや」（『六百番俳諧発句合』）との関わりが指摘され、難波の葦の枯草の風景こそが「枯野」であったと述べる論者もいる<sup>51)</sup>。つまり、難波の葦原が「枯野」であるとの説である。それに対して、私は「枯野」とは河内野のこと、すなわち9月9日の重陽の節句に生駒山の暗峠を越えてきた旅の風景である可能性があるとの説を提出した。少なくともこの解釈を「枯野」の選択肢に加えることができる<sup>52)</sup>と論じたのである。

それは、芭蕉が大坂に到着して以来の動向、とりわけ発句を吟味・解釈することによって得られた結論である。いわば、芭蕉は旅が終わったところから改めて「旅」を始める。そのことは、元禄2年8月に大垣で終了した「おくのほそ道」の旅を、5年近くかかって『おくのほそ道』にまとめ上げるまで、彼がその旅を反芻し続けていたことともかかわり合うだろう。「おくのほそ道」、すなわち芭蕉が実際に体験した旅を紀行文『おくのほそ道』に再構成する過程で、その結末は元禄2年（大垣に到着した8月ではなく）9月6日に措定されていた。重陽の三日前である。その際、芭蕉が重陽を意識していたかどうかはわからない。ただ、芭蕉が『おくのほそ道』の彫琢に最も深くかかわったであろう元禄6年の秋に、芭蕉はそれまでになく多くの菊の句を詠んでいる<sup>53)</sup>。『おくのほそ道』には、7月末から8月初旬にかけて滞在した山中温泉での菊の句が一句載せられているのだが、それは「山中や菊は手おらぬ湯の句ひ」というものであった。「山中」は山中温泉に対する、いわゆる「土地への挨拶」であり、「菊は手おらぬ湯の句ひ」とは、菊慈童の故事とともに、凡河内躬恒以来の「白菊は視覚をまどわせるもの」という詩歌の伝統をふまえて詠まれた発句であった。

7月末から8月初めといえは確かに旧暦の秋であり、菊が詠まれても不自然ではない。しかし、一般的に俳諧で菊の句が詠まれるのは9月、まさに菊月が中心である。そしてその中心に9月9日の菊の節句（重陽）があった。芭蕉にしても、それ以前に菊の句を詠むことは（当然ながら）ほとんどなかった。私の知る限り、全部で33句ある菊を詠んだ芭蕉の発句のなかで、明らかに菊月以前の菊を詠んだのは、『虚栗』に載り貞享4年以前の句と考えられる「瘦せながらわりなき菊のつぼみ哉」の一句のみである。むしろ、菊月よりあとに詠まれたと思われる句が8句と多い。また、9月9日を過ぎた菊の句になると10句とさらに増える。このように、「残りの菊」（残菊）を詠む傾向の強いのが芭蕉の菊の句の特徴であった<sup>54)</sup>。

ゆえに、元禄7年にも芭蕉が9月9日以降に菊にこだわっているのは、従前からの流れであり、自然のことといえる。しかし、そこには前年までとは異なる要素も加わっている。それは、9月の終わりに近づくとつれて、芭蕉が「ゆく秋」に執着していることである（前稿Ⅱ）。その象徴が月であり、夕暮時であり、そして菊であった。そのように芭蕉は9月9日に大坂に到着してからも、奈良から大坂までの旅の句境のなかにいることを、むしろ自らに課すように続けていたのである。そして、このことこそが、「旅に生きる」芭蕉ならではの機制であり、芭蕉はそのようにして旅を反芻することによって、次々に紀行文という「もうひとつの旅」を生み出していったのだと考えられる<sup>55)</sup>。

10月8日に「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」、9日に「清滝や波にちり込青松葉」の句を詠

んだ（改訂した）芭蕉であるが、10日に至って再び容態の急変があり、この日9月25日以来14日ぶりに自ら筆を執って、兄半左衛門に宛てて遺書をしたためた。そして11日には食を断って不浄を清め、12日の夕刻に亡くなった。すなわち芭蕉が遺書を書く心境に至ったのは10月10日のことであり、8日、9日に詠んだ新作と改作は、そのような心境に至る前の発句であったと考えられる。

ただ、自筆遺書の原本（現物）は現存せず、写し（書写）や図版（古い写真）として伝わるのみである。そして、これが本当に芭蕉の遺書であったのか否かは未だ確定していない。自筆遺書の他に、芭蕉は門人たちに向けた3通の遺書を支考に代筆させているが、これらも本当に芭蕉の遺書であるかどうかは長く議論の対象とされてきた。そして、現在もお決着を見ていない<sup>56)</sup>。

これらは、極論すれば支考の贋作であった可能性が皆無ではない（言われてきたように、その内容には余りに支考への信頼と評価が強く表われすぎている）。ただし、そのような支考への評価や信頼は、亡くなるまでの芭蕉の動静と支考の介助に照らすならば、あり得ないことではなかった。また、本来そこに名前が挙がっていてよい何人かの門人の名を欠いているのは、3通の他にも遺書があったか、遺書とは別のかたちで告げた（たとえば去来には直接に話したように）などといった可能性が考えられる。

10月5日に大坂から走った急報を受けて、7日の朝から正秀（膳所）、去来（京都）、丈草・乙州・木節（大津）、李由（彦根）らの門人が次々と花屋へ駆け付けた。噂を聞きつけた上方吟行中の其角は、逝去前日の11日に参上している<sup>57)</sup>。そして、ここから李由を除いた6名の門人に、支考・惟然・呑舟と二郎兵衛の4名を加え、総計10名が河舟に乗り込み、淀川を遡って大津の義仲寺まで芭蕉の遺体を運んだ。そのような遺体の運搬が、決して法的にやさしいものではないことが指摘されている<sup>58)</sup>。実際それは、芭蕉の遺体を物のように扱ひ（隠蔽し）、公儀の目を憚っての移動であったことは、押さえておく必要がある。

南御堂（難波別院）の裏手（西側）を南北に流れる西横堀川（1971年に埋め立てられ、現在は阪神高速1号環状線）を中之島に向けて北進し、土佐堀川から大川（かつての淀川本流）を東へ北へと向かって、蕪村の『春風馬堤曲』で知られる毛馬で現在の淀川に入り、樟葉（水無瀬）から桃山・山科を経て大津に至ったものと考えられる。

支考の『芭蕉翁追善之日記』には、不浄を憚って芭蕉は門人を病室に入れなかったと記すが、このことは信じ難い。確かに看病は医師の木節と之道門の呑舟・舎羅に限り（洒堂宅ではどうだったか）、多数での入室を憚るところはあったのだろう。しかし去来や支考が芭蕉から個別

に部屋に呼ばれたように（『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』、許六宛書簡など）、また正秀や其角が到着後入室して芭蕉に面会したように、単独もしくは少人数での入室を芭蕉が完全に拒んでいたとは思えない。支考の多少の筆のすべりがあったと見てよいのだろう<sup>59)</sup>。

確かに支考の性格、とりわけ芭蕉没後のあからさまな自己顕示は、多くの門人たちの眉を擧めさせた<sup>60)</sup>。しかし、最晩年の芭蕉とは強い精神的紐帯で結ばれていたことは事実であり、他の門人には、そのことに対する嫉妬が強かったことも確かであろう。そのような空気を読まず（読めなかったのか、あえて読まなかったのかは判断が難しいが）、支考が芭蕉とのかかわりの深さ強さを声高に喧伝し続け、それが結果的に他者を貶めることにもなったために、支考に対する多くの悪い評判が語られ、記されるに至った。かといって、それらの全体をそのまま受け取ることも事実を誤って理解することにつながるだろう。たとえば、兄半左衛門宛の遺書までを贗作と見るのは無理が大きすぎる。実際に伊賀上野の松尾家には芭蕉の遺書が残されていたことを示唆する形跡が認められる。そして、そうであれば他の遺書が実在していてもおかしくはない。芭蕉が支考に口述したという3通の遺書も、まずはそれらが実在したというところから考察を始める必要があるだろう。

ここで、いささか時間を巻き戻したい。9月9日に暗峠を越えて奈良から大坂へとやって来た芭蕉の「旅」についてである<sup>61)</sup>。標高約80mの猿沢池畔も、現在に続く行楽地として日常とは別の異世界であったが、そこから標高200~300mの矢田丘陵を越え、生駒東麓を登って、芭蕉は標高455mの暗峠を越える<sup>62)</sup>。そこで詠んだとされるのが「菊いでに出て奈良と難波は宵月夜」であった。実際にはそれから14日後の猿雖・土芳宛書簡に初めて記されるのであり、芭蕉たちが暗峠を越えたのは同日正午過ぎであったと考えられるが（前稿Ⅰ）、芭蕉はここで、奈良（大和）と難波（大坂）という2つの世界の境界を越え、昼から夜の世界に至ったことを詠んでいる。重要なのは、重陽とはまさにそのような陰と陽から成る二元論の究極的な表現であり、むしろ実体であったことである。最大の陽数が重なるゆえに「重陽」。芭蕉はその特別な日を選んで奈良と大坂（難波）の境界（二つを分け、そしてつなぐ）である暗峠を越えてきた。そして、「菊いでに出て奈良と難波は宵月夜」という実に境界的な発句を詠んだ。

実際、芭蕉は門人の仲裁という名目を得て、9月9日の重陽の節句に「くらがり峠」を越えた<sup>63)</sup>。その結果、多くの代償を払うことになったが、それは何にもまして「生」（生きること、生命力）の更新と増進を目的とした「旅」であったと考えることができる<sup>64)</sup>。その旅の当面の目的であった門人同士の仲裁をすっぱりとあきらめた9月22日以降の芭蕉は、「おもしろき」という発句を皮切りに（兄への消息を伝えた懸案の書簡も、その「すっぱり」を助長したか）、

長寿の象徴としての菊へのこだわりを再燃させる。前稿Ⅱでは9月9日以降、芭蕉が一貫して菊（旧名クク。それはまさに「九」と「九」が重なることを示す名であった）に拘泥していると論じたが、詳細に見れば、いったん菊への執着は弱まっており、具体的にその時期は酒堂・之道の仲裁を目的とした14日、19日、21日の三回の句会の間であった。菊への思い、菊の句境が再開したのは23日以降である、23日の意専・土芳宛書簡に記した「菊に出て」以降、再び「重陽之朝」に言及した25日の正秀宛書簡など、ここから菊への思いは再燃する。そしてそれは27日の「白菊の目に立て、見る塵もなし」に結実する。もし、菊の句境のなかで「白菊の」の句が詠まれなかったとすれば、結果的に「清滝や」の改訂もなかったであろう。つまり、辞世句に相当する発句は詠まれないままで芭蕉の俳歴は閉じられたかもしれない。

ただし、秀句の連続も、29日の容態急変によって途切れる。以後、10月8日の「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」まで、芭蕉は一切発句を詠んでおらず、句会に加わっていないため付句もない。もし、この間に仮に未完成であっても芭蕉が発句を詠んでいたならば、伊賀上野出立以前から影のように芭蕉に寄り添い、その動静を記録し続けた支考が記していただろう。つまり、それほどに芭蕉の体調は悪化したと考えられる。そして、9月末日の29日に至って芭蕉の容態は一段と悪化し、10月5日には病床を道修町の之道邸から御堂筋<sup>65</sup>に面した花屋仁右衛門の貸座敷へと移している。之道邸のある道修町から、ほぼ真南へ向けて1キロほどの移動である。

御堂筋という名の通り、北御堂（本願寺津村別院）と南御堂（難波別院）を結ぶこの道は、この頃の幅5～6メートルとはいえ大坂三郷（市街地）の主要幹線道路であり、交通手段は充実していた。十中八九、駕籠での移動であったと考えられる。それは9月26日の句会が開かれた晴々亭（浮瀬）までの片道約5キロの道を、そのまま5分の1ほどたどり直す道程であった<sup>66</sup>。ちなみに浮瀬跡は現在「俳跡蕉蕪園」と、芭蕉と蕪村の俳名から1文字ずつとって呼ばれている。薬種問屋が立ち並んだ道修町からの移動であることは、芭蕉の病状がすでに薬では埒が明かなくなっていたことを窺わせる<sup>67</sup>。

其角の『芭蕉翁終焉記』によれば、10月8日に木節・去来・惟然・正秀・之道・伽香・支考・吞舟・丈艸・乙州によって「賀会祈祷の句」が詠まれたが、支考の『芭蕉翁追善之日記』には載らない<sup>68</sup>。11日、芭蕉は枕許に丈艸・去来・惟然・支考・正秀・木節・乙州（『芭蕉翁終焉記』）を呼び寄せ発句を詠ませている<sup>69</sup>。『去来抄』には「丈艸できたり」と芭蕉が丈艸の句のみを褒めたと記す。「うづくまるやくわん（薬缶）の下のさむさ哉」と記すが、これは赤羽学氏も述べるように（『芭蕉翁追善之日記』108頁）、『芭蕉翁追善之日記』や『丈艸発句集』の「うづくまる薬の下の寒さ哉」が正しいだろう。12日、申の刻（夕方4時頃）に逝去した芭蕉を、

その夜、川舟で大津に運ぶ。去来・其角・乙州・丈艸・支考・正秀・木節・惟然・呑舟・二郎兵衛の10名が乗り込み、伏見を経て13日の朝に到着の後、その日の真夜中である子の刻（14日0時前後）に埋葬されている。支考は「雨晴たり」と書き添えており（『芭蕉翁追善之日記』）、雨中の移動であった。

真夜中の埋葬は、到着してからの準備をうかがわせるが、死者、特に行路病死<sup>70)</sup>は本来奉行所への届け出が義務付けられており、にもかかわらず大坂（南御堂）という直轄地（大坂西奉行所の所轄管内）から大津という遠方にまで移動させたことを憚ってのことと考えられる。支考の記述によれば「焼香の人々、高弟子をはじめて染衣の人円頂のもの士人商家すべて八十余哀のもの三百余人」（『芭蕉翁追善之日記』）も集まったのは事情を知らなかったということもあるだろう。

このように見てくると、「旅に病て」が詠まれた8日には、去来をはじめとして木節・丈艸・乙州・正秀らが花屋に集っていたのであり、介護に携わってきた呑舟に墨を摺らせるのはよいとして、支考のみを呼んで「旅に病て」を伝える（さらに、「なほかけめぐる夢心」の別案を示す）ということが腑に落ちない。なぜ他の門人たちを呼び寄せなかったのか。つまり、芭蕉自身もこの句を辞世句と考えたわけではなく、まだこの先にも作句を続けるつもりだったのであろう。医師として最期まで看護に当たった木節を呼んでいないことから、この時の芭蕉が危急の体調にはなかったことが察せられる<sup>71)</sup>。

芭蕉は、「奈良と難波は（その二つの国のいずれもが）宵月夜」と詠んで「重陽の世界」を再び召喚した。月と太陽、夜と昼といった二つの世界を二つながら受け入れるという覚悟を決めたと記せば、いかにも観念論に近づくが、9月9日から10月12日までを「ひとつ」と数えるのではなく「ふたつ」、その間に明らかにフェーズ（局面）が変わったと捉えるべきである。そしてそれは仲裁への取り組みという局面と、仲裁の断念という局面から発していた。しかし実際はもっと現実的に、洒堂のところから之道のところに移ったということから発した気分の違いであったかもしれない。9月9日から20日までの12泊を洒堂の邸、21日の車庸の邸への1泊を間にはさんで、9月22日から10月4日までの同じく12泊を之道の邸で過ごしたのではないかと推定した。そのあたりに大きな転換点があり、いわば解放感が21日の夜更かし、23日、25日の現存するだけで2通ずつ4通の書簡執筆という、それまでできなかった作業を経て、26日、27日、28日（さらには29日も予定されていた）という句会への連日の参加を促したのは、その気分であったと思われる<sup>72)</sup>。しかし、そのことが結果的に死期を早めたことも間違いのないところである。それを残念であると感じるのはあくまでも結果論であり、後世（現代）の日常生

## 「くらがり越え」の旅

活者が抱く感想にすぎない。上に見たような経緯が芭蕉の発句を生み、珠玉の句々を生まされたという事実に限らず。9月29日に病態の急激な悪化があり、10月10日にも容態急変があって、その間にも芭蕉が徐々に衰弱していったことは、『芭蕉翁追善之日記』や『笈日記』が記録する、10月7日以降に次々と芭蕉のもとへとやってきた門人たちの反応が物語っている<sup>73)</sup>。そして、10日に芭蕉は遺書をしたため、11日の絶食を経て、12日に逝去した。

9月10日から芭蕉は毎夕「熱、寒気、頭痛」に悩まされていたとはいえ、むしろ23日以降のほうが病勢は進んでいたはずである。それでも23日から28日までの6日間に詠んだ発句には、後世秀句と呼ばれるものが多い。23日の「この道を行人なしに秋の暮」、26日の「此秋は何で年よる雲に鳥」、27日の「白菊の目に立てゝ見る塵もなし」、そして28日の「秋深き隣は何をする人ぞ」などである。先記の通り、仲介に関してやれるだけのことはやったという満足感もあっただろうし、この間は病状も小康状態を保っていたと考えられるが、これは酒堂より之道の屋敷の方が過ごしやすかったことの反映でもあったのではないか。

このような日々のなかで芭蕉が直近の旅、すなわち「くらがり越え」の旅を反芻し続けたことを指摘した<sup>74)</sup>。旅の準備という「第一の旅」があり、実際の旅（第二の旅）があって、帰宅後にそれを振り返る「第三の旅」があるとは、今でもよく言われることである。芭蕉にとっての旅とは、むしろ帰宅後に紀行文に再構築する『旅』を含めてのものであり、そちらが主体となることもあった。むしろ、『おくのほそ道』を完成させた時点で、それは実際の旅以上の存在感を伴って芭蕉の内に存在したのではないか。その意味で、「おくのほそ道」という実際の「旅」よりも、『おくのほそ道』という概念的な『旅』のほうに実体があったとさえ言えるのではないかと考えられる。その点を述べる紙幅は本稿には残っていないので、ぜひ改めて考察の対象としたい。

## 6. 「夢は枯野を」

前稿Ⅱで私は、「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」の「旅」は本稿に扱う「くらがり越え」の旅であり、「枯野」はその折に越えてきた河内野である可能性について論じた。しかし、芭蕉は具体的な場所ではなく、いわば抽象的な場所というものも詠んでいる。それでも「旅に病て」の「枯野」が具体的な場所である可能性は残り、芭蕉の「旅に病て」が具体的な場所を意味していないのであれば、むしろそのことを証明する必要があるだろう。また、旅が「くらがり越

え」の旅を意味しているのだとしても、「夢」の抽象性は残る。芭蕉が夢見たものが直近の旅（河内野の旅）であったことを証明する直接の証拠が存在しないからである。その場合、「夢は（枯野を）かけ廻る」の「夢」は、いったいどこを（どの範囲を）かけ廻っているのか。

支考が記すように「旅に病て夢は枯野を」ではなく、「旅に病てなをかけ廻る夢心」の形が選ばれていたとすれば、ここには「枯野」が存在しない<sup>75)</sup>。つまり「枯野」は、この折の芭蕉にとって、「旅」と「夢」に比べて低い重要度であったと考えられる。もちろん、芭蕉が選んだのは「夢は枯野を」であったから、これにもとづいて考察を進めればよいわけであるが、「枯野」が（いわば）二の次であったならば、難波津の歌とのかかわりは明らかに薄れる<sup>76)</sup>。「夢は枯野をかけ廻る」の別案として「なをかけ廻る夢心」があったということも、そのまま受け入れるべきであろうが、芭蕉に改訂の意思があった場合でも「旅に病て」のみは共通する。そうであれば、この句の基幹をなしているのは「旅に病む」ことであったと言い換え得る。もちろんそれまでも持病の自覚はあったわけだが、芭蕉が「旅に病む」と自覚したのは、芭蕉自身の記述に従うならば、この旅が初めてである。

そして、その前提のうえに「夢」が位置する。それが「なをかけ廻る夢心」にまで拡充された可能性のある「夢」であるならば、中七・下五の双方にまたがるほどの比重を持つ。これら高い比重の「旅に病む」と「かけ廻る夢」に比べるならば、「枯野」の比重はごく軽い。少なくとも「枯野」は、この発句の中心的主題ではないと理解できる。

その場合、「枯野」もまた「旅」や「夢」と同様に、芭蕉がその生涯を振り返り総括的なものとして詠んだのではないのであれば、一回的な旅（芭蕉が最後まで執着していた旅）の枯野（河内野）である蓋然性も高まるのではないか。芭蕉は大坂に到着して以来、9月から10月にかけて直近の旅、本稿に言う「くらがり越え」の旅にこだわってきた。それが本稿に述べる芭蕉の「旅のかたち」であったが、末期に及んで人はみずからの人生の集大成を試みるものだという一般論も、それが芭蕉に適應できるものかどうか証明されてはおらず、それを否定する証言者さえいる<sup>77)</sup>。

一般論を重ねることになるが、アーティストの多くが常に現在という先端の一点のみを対象として生きる（過去を捨てて変貌する）ものであるという定義を芭蕉ほど体現した創作者は（少なくとも同時代において）いないのではないか。現在問題にしている、元禄7年9月から10月にかけて「その一点」こそは「くらがり越え」の旅であった。結果的にそうなったのであれ、「旅に病て」という際の「旅に」は、「くらがり越えの旅に」と言い換えうる。もちろん、芭蕉はずっと「病んで」きたのであり<sup>78)</sup>、その一方で「旅」を続けてきた。そうであれば、「旅に病て」



とは「旅の人生の最後に病みついて」と受け取るべきなのではないだろうか。

しかし、「旅に病て」がほんとうは何を意味しているかは芭蕉以外誰も知らない。この発句を書き記した支考も、その場で墨を摺って筆を用意した呑舟も、あるいはその場に居合わせた第三者（去来がその第一の候補だが、支考は自らと呑舟のみを記している）の誰もがその点については言及していないからである。確実なことは、芭蕉が示した別案「なほかけ廻る夢心」は採用されなかったことであり、その結果、この発句は「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」として確定し、認知されたことである。そうなると、問題は「夢」に絞られてくるのであり、私も前稿Ⅱの末尾で芭蕉の夢について少しく考察を試みたが、包括的な検討には至っていない<sup>79)</sup>。

最終稿・別案のいずれに就いても、この句想における「夢」は、「かけ廻る」ものであった。そして最終稿であれば「枯野をかけ廻る」ものであり、別案であれば「なほかけ廻る」ものであった。この別案の「なほ」あるゆえに、「これまでに重ねてきた旅」に加えて「なほ（さらに）」という意味が付与されると考えられてきた。それは、ここに詠まれた「旅」が包括的なものであり、人生の集大成を意味すると考えられる根拠にもなってきた。「なほかけ廻る夢心」は、支考の記事によれば上五を欠き、それが何であるかと尋ねたかったが、芭蕉の体調に配慮して尋ねなかったことを支考は残念だと記している。ただ、成心なく「なほかけ廻る夢心」に接するならば、「其五文字」は「旅に病て」であろう。そして「旅に病てなほ」と続くのが妥当と思われる。支考がどのような意図でこの条を記したのかはわからないが、もし芭蕉が本当に「夢は枯野をかけ廻る」と「なほかけ廻る夢心」のどちらを選ぼうか迷っていたのであれば、短冊か懐紙かに書きつける以前に、「いづれをか」（どちらがいいか）と尋ねたのではないか。すでに芭蕉はこの句を筆で書きつけていたのである。両案を一枚ずつに書いて（あたかもクイズ番組のように）「どっち？」と示すというのは、この折の芭蕉の体調に鑑みてもあり得ないことと考えられるし、そうであれば初句はすでに書かれていたはずである<sup>80)</sup>。

このように、この条にもいささか不自然なところがあるのだが、支考は芭蕉が末期に及んでも句作の相談を持ち掛けるのは自分であるということを書き付けたかったのである。実際、この発句を記録した者は支考以外にない。其角は「旅に病て枯野をめぐる夢心」という形で『枯尾華（芭蕉翁終焉記）』（元禄7年刊）に記しているのだが、先述の通り、其角が花屋に到着したのは逝去前日の10月11日のことであり、ただし、このこともまた支考しか記していない。其角は直接この発句を芭蕉から示されていない。また、『枯尾華』は基本的に支考からの聞き書きであることを其角自身が述べており、伝聞であることから句形の誤伝が生じたものだろう。支考は其角に対する敬意は惜しまず、翌年江戸に赴いた記録（『笈日記』）にも、最初に其角を

掲げている。わざと誤って教えたと邪推する必要はあるまい。すでに「夢は枯野をかけ廻る」という決定稿があり、芭蕉逝去の心落ち着かぬ時間のなかで其角が支考から聞いた「なほかけ廻る夢心」の前半に、記憶の中の「枯野」が紛れ込んだということであっただろう。「枯野」と「夢心」の同居があれば解釈はまた異なってくるが、ここでは以上のように考えておく。

芭蕉は、最晩年の1か月余り最も支考を信頼し、頼りにしてきたのであり、支考もその期待に応えるために奮闘してきた。芭蕉はそのことに十分感謝し、その返礼をしたのであろう。支考を8日に枕元に呼び寄せ、また9日にも（去来の後であったが）呼び寄せて、いずれも大切な発句を伝えている。この時に支考が「なほかけ廻る夢心」を強く推したならば、芭蕉はどうしただろうか。それは推測でしかないのだが、支考は「其五文字はいかに」（その場合には、上五の五文字はどうなさるのですか）と尋ねることを憚って、「なをかけ廻る夢心」では一体何に（どのように）劣っているのですかと遠回しに尋ねた。しかし、その答えはなかった。芭蕉は「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」をすでに心に決めていたので、いずれにしても支考の答えは正解ではなかっただろう。少なくとも、それは芭蕉を心から満足させるものではなく、そのため芭蕉は支考にはその先を語ることなく、おそらく久しぶりに起き上がって筆を取り、一句を書き付けた疲れもあって、そのまま口を噤んでしまったものと考えられる。

したがって支考は芭蕉の意図を知ることなく、強いて言えば勘違いをしたまま、「いかなる微妙の五文字か侍らん」と幻の初句を追い続けることになった。そして、この経緯をそのまま『芭蕉翁追善之日記』に書き記し、それは公刊される『笈日記』に至ってもほとんど変更されずに残った。多くの門人たちは、支考が自らの手柄を自慢していると受け止め、一部の門人が支考の思いの至らなさに苦笑したのではないか。『追善日記』を原本なり写本なりで読んだ者の中に、支考の勘違いを正すような（芭蕉の心を深く知る）者はいなかったのだろうか。そうであれば、『笈日記』の記述は多少は変わったのではなかったか。このように考えた場合、支考は『笈日記』の原型となる『芭蕉翁追善之日記』を、人には見せなかったものと推測される。

芭蕉が迷った「夢」と「夢心」にはどのような差異があるだろう。あくまでも芭蕉の「夢」とは「枯野をかけ廻る」ものであったが、「なをかけ廻る」ものでもよかった。「旅に病て」という現状認識（現在時）においても、なおその先に「かけ廻る」ことを欲する（さまざまな土地を訪ねて回ることを望む）、「夢心」があった。「夢心」が「夢の心」であるのか、身体的な「夢心地」であるのかも明らかではない。これらのことから、そのような「夢」（夢心）を受ける「枯野」もまた、「（さまざまな夢と同様）さまざまな土地」の一例であり象徴であって、現実のものではないと思われてきたとしても不思議はない。しかし、別案と決定稿の違いを改めて整理して

## 「くらがり越え」の旅

おくならば、「なほかけ廻る夢心」は、「夢に病て夢は枯野をかけ廻る」の別案というより、すでに芭蕉に捨てられた素案のひとつと考えるべきであり、重視する必要はなく、そのうえで芭蕉は支考に「なほかけ廻る夢心」を示して、「いずれをか」（お前ならば、どちらを採るか）と支考をためしたものと考えられる。

逝去の4日前（あるいはすでに3日前）に、そのような、ある意味で悠長なことができるのが芭蕉という人であった。実際、翌9日にも芭蕉は去来、次いで支考を呼びよせて、「清滝や」の改訂を告げている<sup>81)</sup>。この時には、別案を示すこともなく、すでに芭蕉は決定稿を決めていた。「白菊の目に立て、見る塵もなし」という発句の存在によって避けるべき等類が生じていたので芭蕉は焦っていたと理解する向きもあるが、私はそうは思わない（前稿Ⅲ）。9月27日に詠んだ「白菊の」は当意即妙の発句ではなく、芭蕉が時間をかけて練り上げた句である（園女を花に譬えることは、ずいぶん前から決めていたものの）と考えるからであり、そうであれば等類が発生することは27日の園女亭句会の前からわかっていたことである。この句を九吟歌仙の発句に立てることが確実にになった時点からでも10月9日までには11日もの時間があった。29日から急激に病勢は進み、芭蕉は10月7日まで一切の句を詠まなくなるわけであるが、「清滝や波にちり込青松葉」への改訂の腹案は、ただ等類を避けるために切羽詰まって改訂したのではなく、ある程度の時間をかけて温めてきたものと考えられる（前稿Ⅲで論じた）。

以上のように、芭蕉は直近の旅を再構成するあいだにも、かつて詠んだ発句の改訂を考え、次々に発句を詠むなどのことを進めている。実際の旅の再構築が芭蕉における「もうひとつの旅」であると述べたが、それはこの際の芭蕉には、たとえば「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」という発句によっても表現された。そうであれば「旅」が直近の「くらがり越え」の旅であり、「枯野」がその際に越えてきた河内野である蓋然性はやはり高いと考えられるだろう。

## 7. 「くらがり越え」の旅の位相

9月9日の重陽に合わせて生駒山に登るために、8日に故郷の伊賀上野を発ち奈良で1泊、そして奈良から大坂へと向かう旅が（結果的にそうなったというのではなく、最初から）長崎への旅の発端であったということは、すでに述べたようないくつもの理由によって考えにくいことである。

ただ、肥前長崎を最終地点とした西国への大吟行を芭蕉が心にあたためていたことは、9月

25日付で曲水（曲翠）に宛てて書かれた書簡が示している。同日に正秀に宛てられた書簡末尾に「京江戸之状したゝめ候折ふしに御座候て」とあることから、これら2通以外にも芭蕉は書状を書いたであろうと察せられるが、現存は知られていない。右の引用の直後（書簡末尾）に「早々何事もわきまへ申さず候（早々にとりとめのないことを申しました）」（『全釈芭蕉書簡集』による）とあり、結局「京江戸之状」は実際には書かなかった（もちろん書くつもりはあっただろうが、体調がそれを許さなかった）可能性もある。

芭蕉自身が、最初からそのように企図していたかどうかは別として、この旅は、5年前の「おくのほそ道」の旅の続き、少なくともそれにつながる旅であると、芭蕉はこの頃に至って位置づけていたものと考えられる<sup>82)</sup>。ただし、「おくのほそ道」がそうだったように周到的な準備が進んでいたかといえ、そうではなかった。「おくのほそ道」の場合には出発3か月前に当たる元禄2年の初頭から芭蕉は親族・知人・門人たちに宛てた書簡で、奥州から北陸への旅行の予定を伝えている。それらを現存書簡から摘記してみたい。

元禄2年1月17日付松尾半左衛門宛「北国下向之節」

同 1月頃、推定宗七宛「弥生に至り待侘候塩釜の桜、松島の朧月、あさかのぬまのかつみふくころより北国にめぐり秋の初冬までにはみのおはりへ出候」

同 2月15日付桐葉宛「三月節句過ぎ早々松嶋の朧月見にとおもひ立候、白川塩釜の桜御浦やましかるべく候」「仙台より北陸道みのへ出申候」

同 2月16日宗七・宗無宛「能因法師、西行上人のきびすの痛みもおもひ知らんと、松嶋の月の朧なるうち、塩釜の桜ちらぬ先にと」

同 3月23日付落梧宛「松嶋一見のおもひやまず、此二十六日江上を立出候。みちのく、三越路の風流佳人もあれかし」

同 同日付李晨宛「旅立の義は落梧へつぶさに申し進じ候」

このように、事前に具体的な予定が書かれている。しかし元禄7年9月の場合には、そのような形跡は一切見られないのである。そして25日に至ってはじめて曲水（曲水）宛の書簡に旅のことが触れられる。つまり芭蕉にとって9月8日に伊賀上野を発ち、9月9日に大坂（高津）へと至った1拍2日、約74キロに及ぶ「旅」が、生涯最後の旅となった。そして、芭蕉は1か月余り後に逝去するまで、この旅を反芻し続けた。彼にとって、「旅に生きる」とは、そのようなものであった。

## 「くらがり越え」の旅

そのような日々のなかで、10月8日に至って「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」が詠まれるのである。つまり芭蕉は、9月9日に大坂に到着して以来の1か月、病勢の進行に悩まされつつも、その「心」、そして発句のなかで「旅」を続けていた。

前稿Ⅱでは、芭蕉は10月12日に亡くなる直前まで、9月8日に伊賀上野を発って9日に大坂へと到着する短い旅に拘泥していたと述べた。わずか1泊2日、距離にして70キロ余りの旅は、「旅の人」芭蕉にとっては本当に短い旅であった。それは距離にして「おくのほそ道」の約30分の1、時間にして約70分の1という規模であったが、短いながらも芭蕉の心には深く残った旅であったと論じた。そこには確かに芭蕉の心身に深く残るだけのいくつもの要素が付属していたのである。

そして、そこには抜きがたい執着があった。死期を悟った芭蕉が残り短い生涯の中でどのような姿を示そうかと考えたとき、その最後の旅に俳心を注ぐことこそが最もありうべき自らの姿であると考えたのだと思われる。しかし、周知の通り多くを語らずに歿してしまった芭蕉であるから、そのことを証明する作業はまことに困難である。そうでなければ、すでに多くの人がびとが指摘して、通説になっていたことであろう。

そこで、発表の順は先になったが前稿Ⅰでは芭蕉が越えてきた暗越奈良街道について考察を進めた。奈良から大坂へと至る最短距離の街道（正確には脇往還）に設置された宿場は河内側の松原宿だけであり、そこには二疋の番場（荷物用の馬）が用意されているに過ぎなかった。他に、大和郡山藩を対象とした本陣が大和側と河内側にひとつずつ設置されたが芭蕉には無縁である。また、生駒山の暗峠を降りて河内平野に至れば、そこには旧大和川に属する河川が南北に、街道とほぼ直交していて、恩智川・吉田川・菱江川・楠根川・長瀬川・平野川といった川幅数十mから数百メートルにも及ぶ河川を次々に渡って行く必要があった。すなわち芭蕉の当時、東西に延びるこの街道には駕籠は多くはなかった。数百メートルから数キロ行くたびに川舟に乗り換える必要があったからであり、大名行列でもなければ駕籠に乗ったまま移動することは稀有のことであった。

『河内名所図会』など近世中～後期の画像資料には、この街道をゆく駕籠や馬が多数描かれているが、それは宝永元年（元禄17年3月13日に改元。西暦1704年）の大和川河道変更工事（付替え・川違え）によって上記の河川がほとんど埋め立てられ、川幅数メートルから広くとも数十メートルの水路に変貌したことによる。その工事がなければ、この街道の陸上交通（馬・駕籠など）の発達はなかったはずであり、芭蕉は「付替え」10年前、陸上交通が未だ整備される以前のこの街道を、ほぼ間違いなく徒歩で移動したことを考証したのである。

しかしその「旅」は、彼自身の書簡や同行した支考の記録（『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』）に見られるように、芭蕉にとってかつてないほどの苦しい道のりであった。むしろそれゆえに、奈良から大坂へと向かう僅々30キロ余りの行程で、その後9月9日の重陽の節句にこだわり続ける示唆を得たのだと思われる。

先に、そのような旅が末期の病床にある芭蕉の胸中で『おくのほそ道』へと結びついたのではないかと述べた。菊の秋を迎えながら9月6日に幕を閉じた「おくのほそ道」の旅に、9月8日から始まる「くらがり越え」の旅が連結するように構想されたのだと指摘した。その詳細については、場を改めて考察する必要があるが、この小さな旅に芭蕉が最後まで拘泥した要因のひとつとして、いわば『おくのほそ道』に続く「道」を歩いたという実感が、芭蕉にはあったのだと考えられる。そのような実感の先にこそ、もし芭蕉の寿命がこの後も続いたのであれば、この旅はゆくゆくは西国行脚の旅へと続いたのかもしれない。

しかし、この短い旅がそのまま西国行の発端であったわけではない。むしろ先に「連結」と書いたように、芭蕉は「菊の秋」へと入る直前に（重陽の節句の直前と言い換えることもできる）終結した「おくのほそ道」の旅と連結するものであった。繰り返すが、それは元禄2年の3月から8月または9月にかけての実際の旅ではなく、元禄6年から7年にかけて執筆と推敲を繰り返した『おくのほそ道』という創作上の「旅」を指している。すなわち元禄7年の晩秋に芭蕉が振り返っていたのは、5年前の旅の記憶である以上に、直前まで進行していた『おくのほそ道』という紀行文に結晶化させた「旅」のことであった。

しかし、そこには「菊」がない。「旅」そのものが菊の秋に入る寸前で終結していること、そしてその「旅」にはすでに「萩の秋」が明瞭に描かれていること、主な理由はこの2つであったと考えられる。

大坂に到着してから逝去するまでの1か月余りで、じつは芭蕉が紀行文を残していたなどと言いたいわけではもちろんない。彼の脳裏に繰り返し浮かぶ「菊の秋」「くらがり越えの旅」こそは、ちょうど「おくのほそ道」が終わったところから始まる「後日の物語」であった可能性があると言いたいのであり、その「物語」の流れのなかにこそ9月9日から翌月9日までの芭蕉の俳諧があったと言いたいのである。そのように考えることで、最期の1か月間に芭蕉がなぜ「菊」と「月」と「道」に執着したのかという設問への解答に接近することができる。

## 8. おわりに

元禄7年9月9日以降の芭蕉に関して、私たちに残されたのは10数句の発句と何通かの書簡や遺書、そして門人たちの記録である。しかし、それらは芭蕉の死によって断ち切られたまま、多くは他者の憶測や想像によって埋められて、むしろ芭蕉の真意を覆い隠すように存在しているものも少なくないと思われる。

芭蕉の晩年を論じた先行書には、それぞれの解釈によって大きな差異があるのも当然と言うべきだろうが、芭蕉の生涯には未だに掘り当てられていない鉱脈が残っている。私は俳諧一筋に研究に携わってきた者ではないが、そのような実感とともに本稿を記した。

以上、「くらがり越え」の旅について見てきた。「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」が河内野を詠んだ発句であったならば、この発句こそが、この旅を締めくくるものとなったことになる。芭蕉の人生は元禄7年10月12日で終焉したので、その先のことは計り知れない。しかし、それまでの軌跡に徴して、とりわけ9月8日に故郷伊賀上野を出立してからの芭蕉の動向の考察には（人が亡くなる前後のこととて、おそらく遠慮の感覚も介在したのであろう）手薄さが感じられる。私自身は地域研究として始めた暗越奈良街道の調査であったが、芭蕉の旅について、またその発句について考察を進めることになった。

### 【謝辞】

本稿は、平成29、30（2017、18）年度大阪商業大学アミューズメント産業研究所研究プロジェクト「東大阪市の文化力（カルチュラル・パワー）に関する歴史地理的研究」（研究代表者：石上 敏）にもとづいて成稿した拙稿「暗越奈良街道と芭蕉—東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に—」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第22号、2020年7月）に引き続いて、松尾芭蕉が暗越奈良街道を越えてきた元禄7年（1694）の旅について考察したものである。研究プロジェクトを遂行し、本稿を成稿するに当たり、大阪商業大学の関係各位には多大な助力をいただいた。末筆ながらここに記して心よりの御礼を申し上げるものである。

### 【注】

- 1) いずれも典拠は漢詩文にあり、前者は「歎逝賦」（『文選』）、後者は「春夜宴桃李園序」（『古文真宝後集』）であるとされてきた。
- 2) 拙稿「暗越奈良街道と芭蕉—東大阪市における文化の論として、松原宿を中心に—」（『大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要』第22号、2020年7月）参照。以後、「前稿Ⅰ」と記す。なお実際は、それほど多く

- の年月を旅に費やしたわけではない。「旅の文学」である紀行文が『おくのほそ道』を代表として数編あり、俳諧の宗匠として各地の門人たちに蕉風と呼ばれる俳風を伝えるために移動を繰り返したため、おのずから移動距離が増えていったのである。すなわち、「旅の人生」とは実際の旅のあとに書かれた記録を含めてのものであり、むしろそれを中心とするものであった。
- 3) 拙稿「『旅に病て夢は枯野をかけ廻る』考―「枯野」は河内野ではなかったか―」（『日本文学』第70巻第4号、2021年4月）参照。以後、「前稿Ⅱ」と記す。
  - 4) ただし、その経緯を記した支考は「深更」と記すのみで、それが10月8日のことであったか、9日になっていたかは明らかではない。当時の人びとの意識では、あくまでも「8日から9日にかけての夜」であれば十分であったのだろうし、この句を芭蕉畢生の辞世句ととらなければ日付はさほどの意味をなさない。
  - 5) 堀切 実・田中善信・佐藤勝明編『諸注評釈 新芭蕉俳句大成』（明治書院、2014年）参照。
  - 6) 「ふるさとは遠きにありて思ふもの」（『小景異情』）とうたった室生犀星などを引き合いに出して、それは近代に出現した情操であると述べられることも多かったが、すでに近世の俳諧には多く詠まれている。それも、「春風馬埜曲」で知られる蕪村以前からしきりに詠まれているのである。
  - 7) 『おくのほそ道』の成立時期について、従来最も説得力があったのは、「元禄五年冬ごろから六年春夏までの間は長編『奥の細道』の執筆には全く不向きな環境だったと考えないわけにはいかない」という理由から元禄六年夏までを除外し、仔細な考証を経て「自筆本『奥の細道』の執筆時期は元禄六年の初秋盆過ぎから初冬の頃までのほぼ三箇月間にわたったものと推定する」とした今栄蔵氏の考証であるとする。注9)参照。
  - 8) 引用は、『芭蕉文集（日本古典文学大系）』（岩波書店、1959年）に拠る。
  - 9) 『おくのほそ道』の成立時期に関しては、いまだに決定的な日時を見ない。今栄蔵氏の説をはじめとする、注7)の通り従来定説に従う。今栄蔵『芭蕉研究の諸問題』（笠間書院、2004年）など参照。
  - 10) 芭蕉が大垣に到着した8月21日をもって「おくのほそ道」の旅が終結したと考えられているが、『おくのほそ道』の旅は、9月6日の出発が結末となっている。これらを区別することは、芭蕉の意識を考察するうえできわめて重要であるとする。
  - 11) 芭蕉の紀行文が書かれたのは芭蕉庵を守る深川連衆に宛ててであるとは私は考えている。そこにはどのような違いがあるかと言えば、究極的には伊賀上野が故郷であり、江戸深川はそうではなかったというところに収斂するのではないか。
  - 12) 今栄蔵『芭蕉年譜大成（新装版）』（角川学芸出版、2005年）に拠る。
  - 13) 桜井武次郎『奥の細道行脚―「曾良日記」を読む』（岩波書店、2005年）など参照。
  - 14) 深川に芭蕉庵が設けられてから、そこを留守にした最も長い年月であった。江戸への戻りが遅れた理由のひとつだろう。『おくのほそ道』には「ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかえて、三里に灸すゆるより、松島の月まず心にかかりて、住める方は人に譲り」と記されるが、「住める方は人に譲り」と表明するための譲渡であったとも思われる。
  - 15) 寿貞と芭蕉との関係について本稿では踏み込むつもりはない。ただ、元禄7年6月の寿貞の死去が芭蕉に大きな打撃をもたらしたことは間違いない。
  - 16) この旅に同行した支考によれば、芭蕉自身も「旅」と語っているし、おそらくその認識に従ったのであろう、支考も「旅行」と記している（『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』）。
  - 17) 芭蕉の書簡は、田中善信注釈『全釈芭蕉書簡集（新典社注釈叢書11）』（新典社、2015年）に従う。
  - 18) 『芭蕉翁追善之日記』は、赤羽学『芭蕉翁追善之日記（岡山大学国文学資料叢書8）』（福武書店、1974年）に従う。
  - 19) これまで、伊賀上野から大坂まで芭蕉に同行したのは、支考・惟然・二郎兵衛・又右衛門の4名であると考えられてきた。しかし、『芭蕉翁追善之日記』にのみ、9月8日の夜間のこととして、猿沢池畔への吟行に及んだ芭蕉一行の中に伊賀上野の門人である半残の発句「膝見せてつくばふ鹿に紅葉哉」が載る。また、この句は元禄8年の奥書をもつ浪化編の句集『有磯（ありそ）海』にも載って、半残が詠んだ句であることは間違いない。ただ、元禄7年6月24日付の杉風宛芭蕉書簡によって、実際には『有磯海』の句は浪化に依頼された去来が集めたらしいことが知られている。ただし、去来であれば、よけいに句の出所は把握していたはずである。
  - 20) 各藩によって規定は異なり、職掌によっても変わってきたようだが、「非番」であっても藩士は藩を離れることは基本的にできなかった。伊賀上野の藤堂家においてどうであったか、今後の調査が待たれる。また、曲翠の膳所藩における身分は詳らかにできないが、いずれにせよ、藩士という身分がこのような時に足枷と



## 「くらがり越え」の旅

なって大事な場面に立ち会えないという不運を生ぜしめた。膳所藩であれば、大津はすぐ隣であるのに、藩を離れることが困難であるという事情が伝わってくる。こういったことに嫌気がさし、致仕（退職・脱藩）したり家督相続を早めたりする俳諧師も出てきたのではないか。

- 21) 藤堂藩は、藩主・藤堂氏の名に因る津藩の別称。芭蕉の頃に伊賀上野を治めていたのは藤堂采女（うねめ）であった。
- 22) ただし、伊賀から奈良までの8日の道中是一部（笠置から奈良の一、二里手前）まで舟旅を含んでいた。にもかかわらず芭蕉は「殊のほかによは（弱）り給へ」たのである。
- 23) 本文は「熱」であるが、意によって「熱」に改める。
- 24) 深沢眞二『旅する俳諧師（芭蕉叢考二）』（清文堂書店、2015年）。
- 25) 大津までの行程を木佐貫洋氏が詳細に考証している（『『枯野抄』その後—芭蕉終焉の旅路—』『融合文化研究』第21号、2014年）。大方において賛同できる行程である。
- 26) 元禄7年9月25日付曲水（曲翠）宛書簡。注17)の『全釈芭蕉書簡集』に拠る。
- 27) この場面は胸に迫るものがある。10月7日からは同じく膳所の正秀が花屋にいの一番に駆け付け、12日の計報を受けたのであろう、13日からは臥高・昌房・探芝の3名が大坂にやってくる。12日夜に舟で膳所を旅立ったのであるが、芭蕉の亡骸とともに一行はすでに大津に向かい、その夜には大津に到着していた。つまり入れ違いになったのである。3名はすぐに大坂を立ち、14日に改めて大津へと駆け付けた。そのような中、13日から14日の「夜をせめて」（夜を徹して）やって来た曲翠であった。
- 28) 西日本への蕉風の普及は、その後、門人たち、とりわけ惟然や野坡などの門人たちによってかなえられることになる。ただし、そのようにして流布した俳風がほんとうに芭蕉の望んだものであったかは、かねてより議論の対象とされてきた。中でも、特にその芭蕉の遺志を継ぐべく西国への蕉風の普及に尽力したのが志太野坡であった。越前福井に生まれ、長く江戸で暮らした野坡は、芭蕉逝去の十年後に当たる宝永元年（1704年）に大坂に移って樗木社を起し、そこを起点として中国から九州方面へと行脚を重ね、西国俳壇に一大勢力を築いて蕉風を普及させたのである。
- 29) 玉城司『『芭蕉翁追善之日記』と『笈日記』をめぐって『続猿蓑』編集の一端に及ぶ』（『連歌俳諧研究』第86号、1994年）など参照。
- 30) 沢木美子『風羅念仏にさすらう一口語俳句の祖惟然坊評伝』（翰林書房、1999年）参照。
- 31) 『笈日記』は、早稲田大学古典籍総合データベース（文庫31 A0114）による。
- 32) 竹人は俗称辻維信、通称庄太夫。津藩の伊賀城代家老である藤堂采女の家臣と伝わる。明和元年（1764）に72歳で没した。『芭蕉翁全伝』（宝暦12年成）は、最初の本格的な芭蕉伝記として評価が高い。
- 33) その気持ちが「その日はかならず奈良までといそぎて」（『笈日記』）という態度にも現われたものか。
- 34) 注17)に同じ。
- 35) 桑原敬治「各務支考」（復本一郎編『芭蕉の弟子たち』雄山閣、1982年）など参照。
- 36) このことは、『芭蕉翁追善之日記』という「日記」の位相を追求するために重要な事例となる。続考を期したい。
- 37) 注30)など参照。
- 38) ちなみに私は以前から、惟然（いぜん）と意専（いせん）の俳名の近さが気になっている。意専は別号猿雖、俗名は窪田惣七郎で通称惣七。伊賀上野の商家・内神屋で商いを続け、富豪であったとされる。土芳との連名の芭蕉書簡が複数あり、両者の気の置けない間柄を物語っている。単独に宛てられた書簡は合わせて9通が知られ、これは現存する芭蕉書簡の宛先のなかでも上位に当たる。これらの書簡からは、芭蕉の意専への信頼感が伝わってくる。意専は法名であったというが、芭蕉は俳名の猿雖ではなく、現存する最古（元禄4年）の書簡から一貫して意専（または意川）の名を記している。対する惟然には、いかにも風来坊の生涯を象徴して芭蕉からの書簡が残らないが、「惟然坊」であれば「意専」との区別は明瞭であったかもしれない。芭蕉逝去の元禄7年に意専は55歳、惟然は40歳になるかならないかの年齢であった。
- 39) 藤堂藩の家臣である以上、なかなか藩から出ることも難しいと思い、前稿では同行者の数に数えなかった。しかし、芭蕉の体調を心配し、少なくとも奈良まで同行してきた可能性もあると現在では考えている。
- 40) 「□物比興」の虫損部分（□）には「○物」という熟語が入り、「○物比興」という四字熟語を形成するものと思われる。「寄物比興」「譬物比興」などになるものと思われるが、西村燕々は「其」と推定している。
- 41) もちろん本稿は創作ではないが、ただ現存の史料にのみ（その史料すら、特定の個人の取捨によって書かれている）依拠するのではなく、時には根拠のある想像も必要なのではないかと考えている。

- 42) 書簡が書かれなくなったということは、発句（案）も記されなくなったことを意味する。たとえば9月10日から25日までに芭蕉は発句を10句を新しく詠んでいるが、そのうち最初に書簡に記されたものが6句、句会で披露されたものが3句、残りの1句は句集に載ったものである。のみならず書簡には句会での発句が再三記されることもある（前稿Ⅱ）。これに対して、芭蕉が書簡を書いていない26日以降は、当初書簡に記された「此道を行人なしに秋の暮」以外は、5句すべて句会で披露される前提で詠まれたものであった。
- 43) 逆に、杉田玄白などは小浜藩の藩医であっても江戸市中で開業し、1980年代末の貨幣価値で年に概算250万円もの収入があったという（稲垣武『平賀源内江戸の夢』新潮社、1989年）。
- 44) 十八大通の内、桂川甫周とその弟の森島中良については、かつて考察したことがある（拙著『万象亭森島中良の文事』翰林書房、1995年）。
- 45) 同行者については改めて考察を行なうつもりである。
- 46) 支考の『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』、また去来の『旅寝論』『去来抄』を参照。ただし、いずれも多少ずつ内容は異なっている。支考が他の門人たちの存在を抹消した可能性もないわけではない。このように支考の記録には多くの疑問点が含まれている。しかし、支考の代筆した遺書が贋作ということになれば、この「旅に病て」という発句ですら贋作の可能性が出てくる。私はその可能性は採らない。
- 47) 注2)の拙稿（前稿Ⅱ）参照。
- 48) それ以前に去来にも伝えているのだが、その日時は不明である。
- 49) 後述するように、9月10日から芭蕉は毎夕「熱、寒気、頭痛」に悩まされていたとはいえ、むしろ23日以降のほうが病勢は進んでいたはずである。それでも23日から28日までの6日間に詠んだ発句には、後世秀句と呼ばれるものが多い。川舟で同行したのは、11日に駆け付けた其角を加えて、去来・乙州・丈艸・支考・正秀・木節・惟然・吞舟・二郎兵衛の10名であった。8日の「賀会祈祷」に加わった11名から之道と伽香2名が外れ、逆に8日の面々に吞舟が加えられている。親身な介護を続けたことが配慮されたものか。俳諧師としての格から見ても当然の選択であったと言えるのだろうが、之道のみが外されており、酒堂の姿が見えない。膳所・大津さらには彦根や堅田などの近江や美濃・尾張、生地の伊賀、あるいは京都や江戸に比べて大坂に蕉門がさほど普及しなかったのも、芭蕉逝去に至る大坂での経緯が長く尾を引いたことがうかがわれる。
- 50) 注5)の堀切実・田中善信・佐藤勝明編『諸注評釈 新芭蕉俳句大成』（明治書院、2004年）参照。
- 51) 以上のことから、「枯野」は二の次（二次的）なものであるとするならば難波の句とのかわりは（否定はできぬものの）薄いと考えられる（拙稿「芭蕉最晩年の難波の句」『岡大文論稿』第50号、2022年）。他にこの句の成立について記したものがいないため、すべては支考の記事にゆだねられるが、私は芭蕉最晩年における支考の記述は基本的に信ずべきものとする。
- 52) 注2)の拙稿（前稿Ⅰ）で論じた。
- 53) 拙稿「芭蕉の菊の句―「白菊」を詠んだ発句の解釈を中心に―」（『大阪商業大学論集』第17巻第4号（通号204号）、2022年2月）にその一端を述べた。
- 54) 注53)の拙稿「芭蕉の菊の句」を参照。
- 55) それらが誰に向かって書かれたかという問いは、さほど発せられてこなかったように思うが、私はそれらは第一義的に芭蕉庵をつくり守っている深川の連衆に向けてであったと考えている。
- 56) 言われてきたように、その内容には支考への評価と信頼があまりにも過剰である。しかし、芭蕉最晩年の支考を詳細に見ていけば、それもありうるかと思われるのである（拙稿「清滝や波にちり込青松葉」考―支考と去来の証言を検証する―『解釈』第67巻第9・10号（通巻722集）2021年10月）参照。
- 57) 其角『芭蕉翁終焉記』などを参照。
- 58) 注25)の木佐貫氏論が「当時としては誠に希有な遺体の搬送行動」と記し、違例であることを示唆している。
- 59) 従来の考え方では、『芭蕉翁追善之日記』はその巻末に記された日付によって元禄7年11月晦日、すなわち芭蕉が亡くなった翌月末には書き終えられている。そうであれば、たとえば翌年『有磯海』に収録された発句を書き込むことなどできないが、私は元禄8年に『笈日記』が版行されたあとも、支考は自分の手元にあった『芭蕉翁追善之日記』にどれほどかの書き込みを続けていったと考えている。したがって、『有磯海』に載った発句が『芭蕉翁追善之日記』に書かれていても何の不思議もないと思う。そのため、7月8日夜に半残が奈良にいたかどうかは、余計に怪しいと思っている。『芭蕉翁追善之日記』にのみ見えるこの一条が、あまりにも支考の自慢話のパターンに則っているからである。直接自慢はせず、芭蕉を間に置いて自らの才能や機

## 「くらがり越え」の旅

知、そして発句の優秀さを遠回しに語ってみせるのである。そのために伊賀上野の半残を持ってくることなど、公刊を予定していない『芭蕉翁追善之日記』であればお手の物であったと思われる。ただし、そうであった場合、なぜ半残が選ばれたのかはわからない。

- 60) 注29) など参照。
- 61) 行程の詳細は前稿 I に述べた。
- 62) 暗越奈良街道を往来する人々について、注2) の拙稿「暗越奈良街道と芭蕉」で述べる機会があった。
- 63) 『笈の小文』でも芭蕉は「くらがり峠」を越えている。しかし、それは生駒山ではなく、紀伊にある峠の名であった。増田晴天楼『大和路の芭蕉遺蹟』（奈良新聞社、2003年）参照。
- 64) 19日に句会に出席したのにもかかわらず、その後に「すきとやんだ」ことによって、その後も句会に出続けたと言えるだろうか。もちろん義理もあっただろうし、芭蕉もこのまま病魔が退散してくればよいと希望を持っていたはずである。「いまだ気分もすぐれず」というのは、何とか一息ついたものの「まだ気分はすっきりしない」と捉えることもできる。いずれにせよ、10日から20日頃は、病状は軽くなっていたのであろう。何より、短くない書簡を2通書いていることがその証拠である。逆に10日からの病臥は、9月8日、9日の影響が大きかったはずであり、それを芭蕉は「伊賀の山中で」（発病した）と記したのであった。25日の正秀宛書簡は心情の吐露という意味で重要である。「相勤候」は完了・完結を意味している。酒堂の姿を詠んだ発句を載せたのは、酒堂に未練を残してのことか、仲介を依頼した正秀の心情を思っていることか（いずれ決裂の報は伝わるとしても）、あるいはすでに見限ったことなのか判断は難しい。それにしても、『三冊子』に載る「猪の」の改訂は誰が施したものか。まだ「床に来て」の句形であった9月25日から逝去する10月12日まで、芭蕉自身が改訂した記録はない。「床に来て」を詠んだ際に別案として示した可能性はあるが、芭蕉を「猪」に見立てて「きりぎりす」の無謀を諷した別人の改変であった可能性が高いと考える。
- 65) ただし、当時の御堂筋は、幅三間ないし三間三尺（約5・4メートルから5・8メートル。現在の約8分の1）であった。三日連続の句会は、それまで再三にわたって酒堂と之道（まさに「之（行く）道」）の仲裁に意を砕いたことへの反動ともいえるのであり、芭蕉が九月以降、「行く道」のことを詠んだのは、之道への思いを込めてであった可能性がある。
- 66) 9月26日に酒堂がまだ大坂にいたのであれば、彼はいつ大坂を離れたのか。また、この日以降も28日まで酒堂と之道が句会に同座していたのであれば、芭蕉の憤慨は何だったのであろうか。そのあたりのことは支考もまったく記していないし、支考の話を『芭蕉翁終焉記』にまとめた其角も記していない。ここには大きな欠落があって、触れてはならないタブーの様相を深めている。26日以降の酒堂と之道の同座を記した俳書は、泥足の『其便』（元禄7年刊）と園女の『菊の塵』（宝永3年刊）であるが、前者は芭蕉逝去の直後、後者は10年後（1704年）の刊行である。どちらかひとつであれば疑う余地もあるが、いずれにも同席を記すことから、26日～28日の句会には両者が同座したのであろう。その後、「賀会祈祷」の句会が開かれた10月8日までに酒堂は大坂を離れたものと思われる。
- 67) 9月28日に芝柏亭への発句を記して以来、すでに29日以降、芭蕉は自筆の文字を書いておらず、書簡は25日の2通以来書かれた形跡がない。そのように筆を取ることすら難しかった芭蕉が廃案を含めて両句を書いて示したとは到底考えられない。もしそうであったとすれば、当該句はよほど特別なものであるはずだが、先述の通り、支考はこれを「病中吟」としか記していない。
- 68) このように支考の記録は、何も記されていない場合よりも、しばしば厄介な記録となる。やはり、その思考回路は一度できるだけ詳細に解明しておく必要を感じる。もしこれが去来であれば、厄介さはずいぶん減っただろう。厄介な人が記録係をつとめたものだとは思っているのだが、そのおかげで、いくつもの謎が残った。素直な記録者の記録であれば、328年後の現在まで、これほど多くの謎が解かれずに残ることはなかったし、そのことは改めて芭蕉を考察するための契機として決して無意味ではないと思っている。
- 69) 逝去前日に当たる（すでに絶食を始めていた）11日に、芭蕉が「今日より我が死期（死後）の句也、一字の相談を加ふべからず」（『去来抄』先師評）と言って枕元に読んだのは上記の7名であり、8日の面々からは之道・舂舟、そして伽香の3名が抜けている。このことについて支考は全く記していない。
- 70) 芭蕉の場合、引取人が存在したので、いわゆる「行き倒れ」ではなかったが、旅先で死去したことは動かせない事実であった。
- 71) 芭蕉の病状悪化（「泄痢のいたはり」）は29日夜から翌日朝にかけてのことであり（『芭蕉翁追善之日記』『笈日記』）、その後も「二日三日（の比）よりやゝつりのりて」と病態は次第に悪化した。そして10月5日に花屋

へと移動し、6日には「昨夜の暮よりなにがしの葉にて心地よしとてみずからおきかへりて」（『追善之日記』）と小康を得たようにも思えたが、支考は「影もなくおとろえはて、その姿枯木の寒岩に添るやうにおぼえて」と変わり果てた芭蕉の姿を描写している。（同前）。

72) 7日朝から報を受けた門人たちが次々に花屋を訪れ力づけられたのであろう、8日に「旅に病て」、9日に「清滝や」の句を詠むなど、芭蕉の容態はやや落ち着いて見える。8日に「賀会祈祷」の句会が開かれたり、之道が住吉大社まで祈願に行ったりしたもの、まだ多少は余裕が感じられたからであろう。しかし10日には「暮合より発熱して顔容つねにあらす、人々おどろく」（同前。『笈日記』には「此暮より身ほとをりてつねにあらす。人々殊の外におどろく」と病状の急変があって、この日に遺書をしたため、翌日にかけての絶食へと至る。

73) 注71) に同じ。

74) 注3) に同じ。

75) 拙稿「芭蕉最晩年の難波の句」（『岡大國文論稿』第50巻、2022年）に「難波」と「枯野」についての見通しを述べた。続稿を期したい。

76) 難波津とのかかわりは再考すべきことを注75) の拙稿「芭蕉最晩年の難波の句」に述べた。

77) 路通の『芭蕉翁行状記』等。注3) の拙稿Ⅱにていささか論じた。

78) 書簡によれば、延宝9年7月25日付（ただし存疑）木因宛書簡をはじめ、すでに三十代で芭蕉は「持病」について記している。

79) この点については、別稿を準備している。

80) その状況から考えれば、短冊や色紙など、より正式なものが用意されていたと考えるべきであり、万一、近くなかったとしても吞舟が硯を摺って準備をしている間に整えられたと考えてしかるべきである。

81) 拙稿「令和三年度解釈学会全国大会（第五十三回）研究発表報告「清滝や波にちり込<sup>こ</sup>青松葉」考—支考と去来の証言を検証する—」（『解釈』第67巻第9・10号（722集）、2021年）参照。以下、「前稿Ⅲ」と記す。

82) もしこの旅の先に長崎への旅が実現していれば、おくのほそ道の旅に匹敵するものとなっていたはずである。すでに奥州までの大吟行を経験していたことは大きかっただろうが、元禄2年3月の出発前に芭蕉がさまざまな準備に心を砕いたことは現存する書簡からも伝わってくる。しかし、そのような諸々が、大坂までのこの旅ではなされていないのである。